

『華嚴經』と教育(三)

古田 榮作

要旨

善財の求道の旅は続けられる。次に出会ったのは海幢比丘である。深い三昧の中で不思議な現象が顕現する。海幢比丘の足元からは、無数の長者と無数の婆羅門とが、手に手に数々の生活必需品を持って現れ、貧窮者に施し、その窮境を救い慰めており、その両膝からは数多の刹帝利と婆羅門とが立ち現れ、自ら悪を離れ善を修め、真実の道理に安んじ、大衆に向かって妙なる声で道徳を守れと説いており、その体の幾つかの部分から無数の仙人・龍・夜叉・菩薩などが現れ仏教の教えをさまざまな方法で説き明かしている。善財はこの不思議な光景を目の当たりにして菩薩無量無作莊嚴普門法門に触れることができ、海幢比丘の相を観察して六ヶ月以上の時が経った。三昧から目覚めた比丘は、「この三昧は普眼捨得三昧と名づけ、あらゆるさとりへの門戸を普く見きわめて、活殺自在に捨てたり得たりできるもので、般若波羅蜜によって得られる境地であり、何事においても、何物においても障るところのないものです。私はこのことだけを体得しているに過ぎません。これ以上のことは海潮国の捨優婆夷にお聞きなさい。」と言われ、海潮国の捨優婆夷を訪ねる。休捨優婆夷の姿を見ることができた者は誰でも即座に一切の疾病を癒され、心の穢れを離れ、邪な見解を除かれ、あらゆる障を滅することができた。優婆夷は善財に「私はたった一つの教えの入り口に達しただけです。私を見、私を知り、私に親しんだ方々は、決して虚しい結果に終わることがないだけです。私を見るお方は、必ず無上菩提において退転することがありません。私は錠光仏といわれるみ仏が世にお出ましになられた時に、このみ仏の所で出家求道し、浄行を積み、み仏に仕えて教えを身につけました。それから三十六恒河沙の諸仏に仕えて一切諸仏の智慧を了知

し、菩薩の大心を発し、無量の願行を修習してきました。ありとあらゆる国々を浄め、生きとし生ける者を教え導かない限りは、永遠に仏果を証することはできません。私はこの離憂安穩幢という法門を存じているだけです。これ以上のことは毘目多羅仙人にお尋ねになられるといいでしょう。」と善財に更なる善智識を求めての旅を続けるよう勧める。こうして善財は更に毘目多羅仙人、方便命婆羅門、彌多羅尼童女に出会い十住の境地に達し、善現比丘、釈天主童子、自在優婆夷、甘露頂長者、法寶周羅長者、普眼妙音長者、滿足王、大光王、不動優婆夷、随順一切衆生外道に尋ねて、十行の境地に達し、仏道をより深く理解していく。

キーワード…善財童子 求道の旅 善知識 三昧 十住 十行

文殊師利に導かれ、さとりを求めて求道の旅に出た善財童子は、既に徳雲比丘、海雲比丘、善住比丘、彌伽長者、解脫長者から教えを受けた。

解脫長者から無礙莊嚴の法門を説かれた善財童子は彼の勧めにより海幢比丘に菩薩道を尋ねるために足を南に向ける。その途上で善財童子は、解脫長者の教えを正念・思惟⁽¹⁾し、不可思議な菩薩の法門を念じ、不可思議な菩薩の慧の光を思惟することで、不可思議な甚だ深い法界に深く入り、菩薩の不可思議な淨妙なる功徳を摂取し、如来の不可思議な自在の神力を顕現し、不可思議で莊嚴な仏刹を解了し、仏の不可思議を住持する莊嚴なる安住境界を分別して知り、不可思議なる菩薩の境界の三昧の莊嚴さを思惟し、不可思議なる世界の究極は障害がないと分別し、不可思議な菩薩の堅固なる淨業深心に向かい、不可思議な淨業諸願を受持しながら、南方に向かい莊嚴閻浮提頂国に至り、海幢比丘はいずこにおられるかを探し求めると、静かに結跏趺坐されて三昧に入っておられるのであった。その姿は、吐く息も、吸う息もその気配を感じられないほどであり、身は不動に安んじており、何の知覚にも囚われないほどの深い禪定に入っておられた。善財は、比丘の周りで生起する不可思議な現象を目の当たりにする。

從其足下出阿僧祇長者。阿僧祇婆羅門。皆悉頂冠衆寶天冠。各齋妙寶上味飲食一切寶衣香華寶鬘末香塗香資生之具。攝諸貧窮安慰撫接。雨衆寶物。令一切衆生皆大歡喜充滿十方。⁽¹⁰⁾

その足元からは阿僧祇⁽¹¹⁾の資産家と阿僧祇の婆羅門⁽¹²⁾を出し、その各々の頂には数多の宝の付いた冠を被り、各々が妙宝、上味の飲食、一切の宝衣、香華、宝鬘、末香、塗香などの必需品を齎し、貧窮者を慰撫するために摂り、諸々の宝を雨のごとく施与して、一切衆生をして皆大歡喜させ十方に充滿していた。

從其兩膝出利利婆羅門。皆悉聰慧。形色威儀服飾莊嚴皆悉不同。以微妙音訓導衆生。離惡修善住眞實義。說四攝法。令衆生歡喜充滿十方。⁽¹³⁾

その両膝からは利利⁽¹⁴⁾・婆羅門を出した。そのすべてが聡明ではあるが、その容貌・威嚴・服裝は同一ではなく、微妙なる音声によって衆生を訓導し、惡を離れ善を修め、眞實義に住み、四攝法⁽¹⁵⁾を説き、衆生をして皆大歡喜させ十方に充滿していた。

從腰兩邊。出一切衆生數等五通仙人。或服草衣或樹皮衣。皆執澡瓶持三奇杖。威儀庠序無有變異。遊行虛空讚歎三寶。爲衆生說清淨梵

行。調伏諸根演眞實義。攝取世間。令衆生入智慧海。又復演說世間諸論。令次第住一切善根。充滿十方。⁽¹⁶⁾

その腰の両辺からは一切衆生数に等しい五通⁽¹⁷⁾を備えた仙人⁽¹⁸⁾を出した。そのうちのある者は、草の衣を着、ある者は樹皮の衣を纏っていたが、皆瓶と杖とを持っており、戒律などには変異はなかった。彼らは虚空を遊行し、三宝⁽¹⁹⁾を讃歎した。衆生のために清浄なる梵行⁽²⁰⁾を説き、諸根を調伏⁽²¹⁾し、眞実義を演じ、世間を摂取し、衆生をして智慧の海に入らせ、また世間に諸論を演説し、次第に一切の善根に住まわせて、十方に充滿していた。

從兩脇出不可思議龍。不可思議龍女。顯現不可思議諸龍自在。攝取衆生。雨不可思議香莊嚴雲。華莊嚴雲。鬘莊嚴雲。寶蓋莊嚴雲。寶幡莊嚴雲。衆寶莊嚴雲。無價摩尼寶莊嚴雲。寶瓔珞莊嚴雲。寶座莊嚴雲。寶宮殿莊嚴雲。寶蓮華莊嚴雲。寶冠莊嚴雲。天形像莊嚴雲。天女莊嚴雲雨如是等雲。各不可思議。普照十方一切世界。而以供養一切如來。普令衆生皆大歡喜。充滿法界。⁽²²⁾

またその両脇より不可思議な龍⁽²³⁾・不可思議な女龍を出し、不可思議な諸龍を自在に顯現させ、衆生を摂取し、不可思議な香りのある莊嚴な雲、華のある莊嚴な雲などの諸々の雲を出現させ、各々の不可思議な法雲は普く十方の一切世界を照らし一切如來を供養して、普く衆生をして皆大歡喜させ、法界を充滿した。

從胸德字。出無量阿僧祇阿脩羅王。示現阿脩羅王不可思議自在神力。震動一切諸大海水及百千世界。令諸山王相衝擊。震動一切諸天宮殿。映蔽一切諸魔光明。悉如聚墨。降伏一切諸魔軍衆。除滅衆生放逸高慢。離惡害心滅不善法。壞煩惱山棄捨戰諍。又神力覺悟諸生。厭離諸惡永絕生死。不著諸趣普令衆生常樂寂滅。住菩提心。淨菩薩行。住諸波羅蜜。究竟菩薩地。照一切法。普照諸佛方便之法。充滿法界。⁽²⁵⁾

その胸の德字の模様の卷毛からは無量阿僧祇の阿脩羅王⁽²⁶⁾を出し、阿脩羅王の不可思議自在の神力を示現させ、その神力によって一切の諸大海の水と百千世界を震動させ、一切諸魔の光明を映蔽し、悉く墨のように、一切の諸魔軍衆を降伏し、衆生の放逸高慢を除滅し、怒害心を離れ不善の法を滅し、煩惱の山を壊し、戦と諍いを捨てさせた。また神力により諸衆生を覺悟させ、諸惡を厭離して永く生死を絶ち、諸趣に著せず、普く衆生をして常に寂滅を楽しませた。菩提心を持ち、菩薩行を修め、諸波羅蜜を勤め、菩薩地を究め、一切法を照らし、普く諸佛の方便⁽²⁷⁾の法を照らして、法界を充滿した。

從其背出阿僧祇聲聞緣覺。應以二乘化衆生故。著我見者教不淨觀。貪欲多者教慈心觀。瞋恚多者教緣起觀。愚癡多者教方便智慧觀察諸

法。爲等分者說無著法。著境界者說妙願境界。樂寂滅者教入諸趣饒益衆生。充滿法界。⁽²⁸⁾

その背中からは阿僧祇数の声聞緣覺を出し、この二乗をもつて衆生を教化しようとするがために、我見⁽³⁰⁾に執らわれた者には不淨觀⁽³¹⁾を教え、貪欲の者には慈悲⁽³²⁾の心を教え、瞋恚⁽³³⁾の者には緣起觀⁽³⁴⁾を教え、愚痴をこぼす者には方便・智慧と諸法を觀察することを教え、等分を爲す者には無著法を教え、境界に著す者には妙願の境界を説き、寂滅⁽³⁵⁾を楽しむ者には諸々の衆生を饒益する趣に入ることを教えて、法界を充滿した。

從其兩肩出阿僧祇諸夜叉王。諸羅刹王。種種惡身。長短形色。乘種種乘。各與其衆而自圍遶。其有衆生。能行善者。及衆賢聖諸菩薩等。若向正道若得果證。皆悉防衛而守護之。或作金剛力士守護諸佛及佛住處。若有衆生。遭諸恐怖。亦防護之悉令無畏。諸疾病者令得除愈。諸在難者悉令解脫。除滅橫死離諸熱惱。教化衆生令得實利。壞生死輪讀歎法輪摧外道輪。充滿法界。⁽³⁶⁾

その両肩より阿僧祇数の夜叉王・諸羅刹王を出し、種々の惡身は、容貌も雑多であり、種々の乗物に乗っていたが、各々がその仲間に取り囲まれ、それはまた衆生を持っていた。その衆生の中には能く善を行なう者、及び衆多の賢聖・諸菩薩のように、もし正道に向かい、もしくは果証⁽³⁹⁾を得ようとする者は、すべて防衛してこれを守護する。あるいは金剛力士となつて諸佛と仏の住處を守護する。衆生がいて恐怖に遭遇すれば彼らを防護して畏れを除去し、諸々の疾病をもつ者はその苦患を除き癒し、難ある者は悉く解脫させ、横死を除滅し、諸熱惱を離れ、衆生を教化し実利を得させ、生死の輪を壊して法輪を讀歎し外道の輪を摧いて、法界に充滿した。

從其腹出百千阿僧祇緊那羅王。各與百千阿僧祇阿僧祇緊那羅女眷屬圍遶。出百千阿僧祇天娛樂音。說實相法讀歎諸佛。稱美菩提及菩薩行。歎菩提門入法輪門。好樂一切自在法門。演說一切般涅槃門。攝持一切諸佛教門。歡喜一切衆生之門。嚴淨一切諸佛刹門。講說一切諸法界門。除滅一切諸障礙門。宣明一切諸善根門。充滿法界。⁽⁴⁰⁾

その腹からは百千阿僧祇の緊那羅王を出し、その各々が百千阿僧祇阿僧祇の緊那羅女とその眷屬⁽⁴¹⁾に取り巻かれており、また（その腹から）百千阿僧祇の乾闥婆王⁽⁴³⁾が出、各々が百千阿僧祇阿僧祇の乾闥婆の女とその眷屬に取り巻かれており、百千阿僧祇天の娛樂の音を奏で、實相法⁽⁴⁴⁾を説き、諸仏を讚歎し、菩提と菩薩行を称え、菩提門を嘆じ、法輪の門に入り、一切の自在の法門を好樂し、一切般の涅槃⁽⁴⁵⁾の門を演説し、一切諸仏の教門を摂持し、一切衆生の門に歡喜し、一切諸仏刹の門を嚴淨し、一切諸法界の門を講説し、一切諸障礙の門を除滅し、一切の諸善根の門を宣明して、法界を充滿した。

從其口出百千阿僧祇轉輪聖王。七寶具足四兵圍遶。放無慳光雨摩尼寶。諸貧苦者悉令富樂無財施者令得惠施。爲諸群生歎離殺盜邪淫之法。修習慈心。常說愛語。饒益衆生。除滅妄語。遠離惡口。攝取衆生。遠離兩舌說和合語。離無義語說甚深法。悉令衆生遠離口過。讚歎大悲。令衆生歡喜離瞋恚心。分別世間一切正法。觀察因緣照明眞諦。拔諸群生邪見毒刺。除滅疑惑離一切障。明法實義。充滿法界。⁽⁴⁶⁾

その口からは百千阿僧祇の轉輪聖王⁽⁴⁷⁾を出した。その聖王は七宝⁽⁴⁸⁾を具足し、四兵⁽⁴⁹⁾に取り巻かれ、無慳の光を放ち、摩尼の宝を雨降らし、諸々の貧苦なる者を悉く富樂ならしめ、財施無き者は惠施を得せしめ、諸々の群生のために殺盜・邪淫を離れた法を歎じて、慈心を修習せしめ、常に愛語にて説きて衆生を饒益し、妄語を除滅し、惡口を遠離して衆生を攝取し、兩舌を遠離して和合の語を説き、無義語を離れて甚深の法を説き、悉く衆生をして口過を遠離せしめ、大悲を讚歎して、衆生をして歡喜せしめ、瞋恚の心を離れ、世間の一切正法を分別し、因縁を觀察し、眞諦⁽⁵⁰⁾を照明し、諸々の群生の邪見を除滅し、一切の障を離れ、法の実義を明かして、法界に充滿した。

從其兩目出百千阿僧祇日。普照十方滅一切闇。悉令衆生除滅垢障。遠離一切惡道苦毒。令寒者得溫。於垢濁佛刹。放明淨光。廣說乃至普照金銀瑠璃等一切世界及衆生類。除滅衆生心之重闇。悉令歡喜。能辦衆生無量事業。莊嚴一切世界。妙法境界。充滿法界。⁽⁵¹⁾

その兩目より百千阿僧祇の日を出した。普く十方を照らして一切の闇を滅し、悉く衆生をして垢障を除滅せしめ、一切の惡道苦毒を遠離し、寒者をして溫を得しめ、垢濁の佛刹において明淨の光を放ち、広く説くと普く金銀瑠璃等の一切世界、及び衆生の類を照らし、衆生の心の重闇を除滅して、悉く歡喜せしめ、能く衆生の無量の事業を弁じ、一切世界の妙法の境界を莊嚴して、法界に充滿した。

從其眉間出百千阿僧祇天王帝釋。無量雜寶以爲莊嚴。持釋王法。普照一切諸天宮殿。震動一切須彌山王。悉令諸天於天境界生厭離心。歎功德明智慧力。起直心力長深心力。嚴淨念力堅固菩提心。遠離欲樂。讚歎樂見一切諸佛。不歎樂境界樂。歎聞法樂。離世間樂。觀察諸法智慧之樂。離阿脩羅戰鬪恐怖。滅煩惱軍遠離死畏。願降衆魔興妙法山。說須彌山等廣大法句。能辦衆生無量事業。充滿法界。⁽⁵²⁾

その眉間より百千阿僧祇の天王帝釈⁽⁵³⁾を出した。無量の雜宝を以て莊嚴にし、釈王の法を持して普く一切諸々の天宮殿を照らし、一切の須彌山王を震動して、悉く諸天をして天の境界において厭離の心を生ぜしめ、功德力を歎じ、智慧力を明かし、直心の力を起こし、深心力を長じ、念力を嚴淨し、菩提心を堅固にし、欲樂を遠離し、一切の佛を樂見せんことを讚歎し、境界の樂を樂うことを歎せずして聞法の樂を歎じ、世間の樂を離れて諸法の智慧の樂を觀察し、阿脩羅の戰鬪恐怖を離れて、煩惱の軍を滅し、死の畏れを遠離して衆魔を降さんことを

願い、妙法の山を興して須彌山に等しき広大の法句を説き、能く衆生の無量の事業を弁じて、法界に充滿した。

從其額上出無量梵天。妙色端嚴世界無倫威儀庠序。演出妙音讚歎諸佛勸請說法。令衆生歡喜。乃至能辦衆生無量事業。充滿法界。⁽⁵⁴⁾

その額上より無量の梵天を出した。妙色端嚴なること世界に倫（類）無く、威儀庠序として、妙音を演出して諸仏を讚歎し、説法を勸請して衆生を歡喜せしめ、乃至能く衆生の無量の事業を弁じて、法界に充滿した。

從其頭上。出阿僧祇諸菩薩衆。種種形色相好嚴身。放無量光網。現檀波羅蜜。讚歎布施。遠離慳吝無所貪著。莊嚴一切世界。稱揚淨戒。遠離惡戒。安立衆生菩薩律儀。歎大乘戒。出生大悲功德之藏。說一切有皆悉如夢。說五欲樂無有滋味。安立衆生離煩惱法。稱揚讚歎金色身業。讚歎慈心遠離殺害。滅畜生趣。歎多聞力。安立衆生於忍辱力。歎普照自在。遠離放逸。安立衆生於不放逸。歎禪波羅蜜。心得自在。拔邪見刺。讚歎正見。般若波羅蜜。樂智自在。歎隨世間遠離生死。而於諸趣自在受生。歎願力滿足。出諸通明自在壽命。讚歎一切陀羅尼力。出生願力。淨三昧力。現自在生。讚歎智慧。普照一切衆生諸根。分別演說諸心行。照十力智。讚歎自在薩婆若。充滿法界。⁽⁵⁵⁾

その頭上より阿僧祇の諸々の菩薩衆を出した。種々の形色・相好の嚴身は、無量の光網を放って、檀波羅蜜⁽⁵⁶⁾を現じ、布施を讚歎し、慳吝を遠離して貪著する所無く、一切の世界を莊嚴して淨戒を稱揚し、惡戒を遠離して衆生を菩薩の律儀に安立せしめ、大乘戒を歎じて大悲の功德藏を出生し、一切の有は皆悉く夢の如しと説き、五欲⁽⁵⁷⁾の樂は滋味あることなしと説きて、衆生を煩惱を離れたる法に安立せしめ、金色の身業を稱讚し讚歎し、慈心を讚歎し利害を遠離して、畜生趣を滅し、多聞の力を歎じて衆生の忍辱力⁽⁵⁸⁾に安立せしめ、普照の自在を歎じ、放逸を遠離して衆生を不放逸に安立せしめ、禪波羅蜜⁽⁵⁹⁾を歎じて、心に自在を得て邪見の刺を抜かせ、正見の般若波羅蜜⁽⁶⁰⁾を讚歎して、智自在を樂わしめ、世間に隨いて生死を遠離して、而も諸趣において自在に生を受くることを歎じ願力満足して諸々の通明を出だし、自在の壽命を歎じて、一切の陀羅尼力⁽⁶¹⁾を讚歎して、願力の淨三昧を出生して、自在の生を現じ、智慧を讚歎して、普く一切衆生の諸根を照らし、諸々の心の行を分別して演説し、十方智を照らし、自在の薩婆若⁽⁶²⁾を讚歎して、法界に充滿した。

從其頂上。出百千阿僧祇佛身分。具足相好莊嚴。猶如金山。普照一切。出妙音聲。充滿法界。顯現無量無邊神力自在。普雨一切甘露法雲。爲坐道場菩薩。雨平等法雲。爲灌頂菩薩。雨普門法雲。爲深忍菩薩。雨普莊嚴法雲。爲童眞菩薩。雨堅固山法雲。爲不退菩薩雨海藏法雲。爲成就直心菩薩雨普境界法雲。爲方便道菩薩雨自性地音聲法雲。爲生貴菩薩雨隨順世間法雲。爲修行菩薩雨厭離法雲。爲治地菩薩

雨長養法藏法雲。爲初發心菩薩雨精進法雲。爲信行者雨無盡門法雲。爲色界衆生雨無盡平等法雲。爲大梵天雨普藏法雲。爲大自在天雨生力法雲。爲魔天王雨心幢法雲。爲化樂天雨淨念法雲。爲兜率天雨淨意法雲。爲夜摩天雨歡喜法雲。爲帝釋天雨莊嚴虛空法雲。爲夜叉王雨歡喜法雲。爲乾闥婆王自在圓滿法雲。爲阿脩羅王雨大境界法雲。爲迦樓羅王雨無量世界法雲。爲緊那羅王雨饒益衆生勝智法雲。爲諸人王雨不可樂法雲。爲諸龍王雨歡喜幢法雲。爲摩睺羅伽王雨寂靜法雲。爲地獄衆生雨不亂念莊嚴法雲。爲諸畜生雨智慧法雲。爲閻羅王處雨無畏法雲。爲餓鬼處雨正希望法雲。悉令衆生向賢聖門。充滿法界。彼諸如來。一一毛孔。各放阿僧祇淨光明網。阿僧祇妙色。阿僧祇莊嚴。阿僧祇境界。辦阿僧祇事。充滿十方。⁽⁶³⁾

その頂上より百千阿僧祇の仏を出した。身分具足し、相好莊嚴せること猶金山の如く、普く一切を照らし、妙音声を出だして法界に充滿し、無量無辺の神力自在を顯現して、普く一切甘露の法雲を雨降らせた。さとの場に坐して將に仏になろうとして道場に坐する菩薩のためには平等の法雲を雨降らし、次に仏位に即くべき証明を与えられた灌頂の菩薩のためには普門の法雲を雨降らし、真理に安住した深忍の菩薩のためには普莊嚴の法雲を雨降らし、身につけた純一でまじり気のない清らかな素直な心である成就直心の菩薩のためには普境界の法雲を雨降らし、手段・方法をわきまえた方便道の菩薩のためには自性地音声の法雲を雨降らし、菩薩の十住の第四の階位である生貴の菩薩のためには隨順世間の法雲を雨降らし、修行の菩薩のためには厭離の法雲を雨降らし、治地の菩薩のためには長養法藏の法雲を雨降らし、初發心の菩薩のためには精進の法雲を雨降らし、信行の者のためには無尽門の法雲を雨降らし、色界の衆生のためには無尽平等の法雲を雨降らし、大梵天のためには普藏の法雲を雨降らし、大自在天のためには生力の法雲を雨降らし、魔天王のためには心幢の法雲を雨降らし、化樂天のためには淨念の法雲を雨降らし、兜率天のためには淨意の法雲を雨降らし、夜摩天のためには歡喜の法雲を雨降らし、帝釈天のためには莊嚴虛空の法雲を雨降らし、夜叉王のためには歡喜の法雲を雨降らし、乾闥婆王のためには自在圓滿の法雲を雨降らし、修羅王のためには大境界の法雲を雨降らし、迦樓羅王のためには無量世界の法雲を雨降らし、緊那羅王のためには饒益衆生勝智の法雲を雨降らし、諸々の人王のためには不可樂法雲を雨降らし、諸々の龍王のためには歡喜幢の法雲を雨降らし、摩睺羅伽王のためには寂靜の法雲を雨降らし、地獄の衆生のためには不亂念莊嚴の法雲を雨降らし、諸々の畜生のためには智慧の法雲を雨降らし、閻羅王⁽⁸⁰⁾處のためには無畏の法雲を雨降らし、餓鬼處のためには正希望の法雲を雨降らし、悉く衆生をして賢聖門に向かわせ、法界に充滿した。かの諸々の如來は一々の毛

孔より、各々阿僧祇の淨光明網を放ち、阿僧祇の妙色、阿僧祇の莊嚴、阿僧祇の境界があり、阿僧祇の事を弁じ、十方に充滿した。

このように生きとし生ける者それぞれの、境遇環境や修行の階梯に応じて、一切甘露の法雲から雨降らして說法教化して聖賢の門を開き、一一の毛孔から無数の光網を放ってあらゆるみ姿や境界を現じ、一切の事を完成してさとりの大活動が全宇宙に充滿するという情景が現われた。

海幢比丘の三昧が現出した奇特なる光景を詳細に紹介したが、端的に言えばこの光景が物語るところは、長者と婆羅門による衆生への資生の具の施与、すなわち生活の物質的基盤の整備であり、刹那と婆羅門による勸善懲惡、仙人による梵行の說法、龍による如來の供養、阿修羅王による煩惱の除滅、聲聞と緣覺の二乗による化導、夜叉王と諸羅刹王による信心ある者の保護と彼らへの利益、緊那羅王による実相法の說法、轉輪聖王による大悲の讚歎、日による心の暗闇の除滅、天王帝釋による釋王の法の保持、梵天による諸佛の讚歎、菩薩衆による般若波羅蜜の讚歎、佛による各人の境遇に即した修行法を、身体各部位から生じた長者、婆羅門などによって説かれているのである。

このような不可思議な光景を善財童子は目の当たりにして、一心に海幢比丘を観察し、その三昧の法門を念じ、不可思議なる菩薩の境界を思惟し無量無作⁽⁸¹⁾の現在莊嚴普門の法門を思惟し、法界莊嚴の智慧を観察し、佛智に依って住し、菩薩の力を出し、菩薩の願力をたて、菩薩の諸行を増広した。このように正意に觀察すること、一日一夜、乃至七日七夜、半月一月、と時間が経ち六月六日を経て海幢比丘は三昧から目覚めた。

その時に善財は、未曾有のことと感嘆して、合掌して海幢比丘に申した。

甚奇大聖。如此三昧最爲甚深。如此三昧最爲廣大。如此三昧境界無量。如此三昧不可思議神力自在。如此三昧不可稱量。如此三昧慧光明淨。如此三昧阿僧祇莊嚴以爲莊嚴。如此三昧境界不可壞。如此三昧無有退轉。如此三昧普照十方一切世界。如此三昧具有無量義趣方便。大聖。其有菩薩入此三昧。能爲一切除滅衆苦。永絕地獄餓鬼畜生一切楚毒。遠離諸難。令天人趣悉得寂靜。令衆生歡喜。常樂甚深禪定境界。厭離有爲超出三界。發菩提心。長養智慧功德因緣。長養彌廣無上大悲。生大願力。照菩薩道。智慧莊嚴大波羅蜜。究竟出生大乘境界。智慧遍照普賢所行。得菩薩諸地智慧光明。具一切菩薩清淨願行。證一切智境。大聖。此三昧者。名爲何等⁽⁸²⁾。

海幢比丘の三昧の深さ、広大さを賞讃し、菩薩がこの三昧に入ったのならば、一切のために衆苦を除滅して、永く地獄・餓鬼・畜生の一

切の楚毒⁽⁸⁴⁾を絶ち、諸々の難を遠離して、天・人趣に悉く寂靜を得させ、衆生を歡喜させ、常に深い禪定の境界を樂い、有為⁽⁸⁵⁾を遠離して三界⁽⁸⁶⁾を超出させ、菩提心を發して、智慧功德の因縁を長養し、無上の大悲を長養し、大願力を生じ、菩薩の道を照らし、智慧をもって六波羅蜜⁽⁸⁷⁾を修習⁽⁸⁸⁾したために、この三昧を得ることができ、この三昧を得る時には即座に百萬阿僧祇もの三昧を得られると述べる。智慧こそがこの三昧の因であるとするのである。比丘は善財の「三昧の功德の境界があるか」との問いに

此三昧名普眼捨得。又名清淨光明般若波羅蜜境界。又名清淨莊嚴普門。善男子。修習般若波羅蜜故。得此三昧。得此三昧時。即得百萬阿僧祇三昧。此三昧唯有此功德境界。復有餘耶。善男子。此三昧者。分別一切世界。無所障礙。究竟一切世界。無所障礙。遊行一切世界。無所障礙。莊嚴一切世界。無所障礙。修治一切世界。無所障礙。嚴淨一切世界。無所障礙。見一切佛。無所障礙。觀一切佛功德。無所障礙。知一切佛自在神力。無所障礙。究竟一切佛力。無所障礙。度一切佛功德大海。無所障礙。雨一切佛淨妙法雲。無所障礙。度一切佛法。無所障礙。得一切佛轉法輪智不可破壞。無所障礙。得一切佛清淨大衆之源底。無所障礙。隨順普入十方世界。無所障礙。隨順觀察十方佛。無所障礙。大悲攝取十方衆生。無所障礙。大慈充滿十方世界。無所障礙。見十方佛心無厭足。無所障礙。隨順遍入衆生大海。無所障礙。了知衆生一切根海。無所障礙。分別一切諸衆生海。無所障礙。善男子。我唯知此清淨光明般若波羅蜜三昧法門⁽⁸⁹⁾と、障礙なく、一切の世界を分別⁽⁹⁰⁾や一切世界の究竟⁽⁹²⁾や一切世界の遊行にも、一切世界の莊嚴にも、一切世界の修治⁽⁹³⁾や一切世界を嚴淨する⁽⁹⁴⁾ことも、一切の佛を見るにも、一切の佛の功德を觀ずることも、……もできるような状態こそがこの三昧である、私はこの清淨な光明般若波羅蜜三昧の法門を知っているだけであると言明するのである。

云何能說諸大菩薩究竟之行。諸大菩薩皆悉深入智慧大海。善能分別清淨法界。智慧究竟一切法趣。慧光無量。充滿一切。得大陀羅尼自在光明。一切三昧圓滿清淨。出生一切自在通明。深入一切無盡辯海。雷震一切諸地音聲。悉能救護一切衆生。我尚不能說彼所行。況其功德。顯其境界。說其境界。照其法門。明其積聚諸功德藏。說其正道。諸三昧流平等智慧。善男子。於此南方有一住處。名曰海潮。彼有園林名普莊嚴。有優婆夷名曰休捨。汝詣彼問。云何菩薩。修菩薩道淨菩薩道⁽⁹⁴⁾。

しかし、私には大菩薩の究竟の行を説くことは出来ないし、大菩薩の所行も説くことはできないし、ましてやその功德についてはいうまでもない。その境界を明らかにし、其の境界を説き、その法門を照らし、その積み重ねられた諸々の功德の宝藏を明らかにし、その正道、

諸々の三昧海と平等の智慧を説くことはさらさらできない。海潮というところの普莊嚴園林にお住まいの休捨優婆夷を訪ねて彼女にお尋ねなさいと勧めたのである。

爾時善財童子。正念思惟海幢比丘。心未曾捨。樂見無厭。顧戀聖音。目想慈顏。正念思惟。其心境界。三昧境界。願行境界。正念思惟。明淨智慧。敬善知識。向善知識。念善知識教。於善知識起愛恭敬。又作是念。因善知識得見諸佛。善知識者。開示顯現一切佛法。善知識者是奇特法。令人得見諸佛法故。善知識者爲明淨眼。令人見佛如虛空故。善知識者爲善津濟。令人於佛華池得源底故。漸漸南行至海潮處。南へ向かう善財は海幢比丘の教えを正念していた。そうする中で善財は「善知識にめぐり合うことで、諸々の仏を見させていただくことができ、善知識は一切の仏法を開示し顯現していただけるし、善知識は人に諸仏の法をさとらせるが故に、奇特の法であり、人に虚空のような仏を見させるので明淨の眼であり、人を仏の華池でその水の湧き出る源を明らかにするので善き津濟である」との想いを抱くようになった。

爾時休捨優婆夷。處金色藏座。海藏寶莊嚴網羅覆其身。……其有得見此優婆夷者。一切衆病悉除愈。心淨離垢拔邪見刺。除滅障礙淨無礙地。於彼地中長養善根成就諸根方便。攝一切智。一切陀羅尼門。一切三昧門。皆現在前。發一切願門。究竟一切行門。出生一切淨門。其心廣大。出世一切通。得無礙身靡所不至。⁽⁹⁷⁾

その時に休捨優婆夷は金色藏の座に坐して、海藏宝をもって莊嚴せる網羅にてその身を覆い、……（四方八方から來訪した者で）此の優婆夷を見ることができた者は、一切衆の病皆悉く除滅し、心淨く垢を離れ、邪見の刺を抜き、障礙を除滅して、無礙地を淨め、彼の地の中に於て善根を長養し、諸根の方便を成就し、一切の智に攝して、一切の陀羅尼門と、一切の三昧門とは、皆現前し、一切の願門を發し、一切の行門を究竟し、一切の淨門を出生し、その心廣大にして一切の通を出生し、無礙の身を得て至らざる所が無い、と。その姿に接するだけで身心の病や垢が除去され、邪見もなくなるとするのであり、あらゆる障を滅することができるとされているのである。

爾時善財童子。入普莊嚴園林。周遍觀察。見休捨優婆夷處金色座。往詣其所。頭面禮足遶無數匝。白言大聖。我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何學菩薩行。修菩薩道。唯願爲我具足演說。答言。善男子。我唯成就一法門。若見聞念知親近我者。皆悉不虛。善男子。若有衆生。不種善根。不親近善知識。不爲諸佛所護念者。彼諸衆生不能見我。善男子。若有衆生。能見我者。則於阿耨多羅三藐三

菩提得不退轉。東方諸佛常來我所。處寶師子座爲我說法。南西北方四維上下一切諸佛悉來我所。處寶師子座爲我說法。善男子。我常見諸佛菩薩。未曾遠離。善男子。我此大衆有八萬四千億菩薩。皆我同行於阿耨多羅三藐三菩提得不退轉。此普莊嚴園林一切衆會。亦於阿耨多羅三藐三菩提得不退轉。⁽⁹⁸⁾

善財童子は普莊嚴園林に入り、休捨優婆夷がどこにおられるかと周りを觀察すると、彼女は金色藏の座に坐っておられるのであった。菩薩の行と菩薩の道を私のためにお説き下さいと願うと、彼女は『私はただ一法門を成就しているだけである。若し私を見聞きし、念知し親近する者は、皆悉く何かを獲得するであろう。若し、衆生がいて、善根を植えず、善知識に親近せず、諸佛のために護念されない者は、私を見ることができない。衆生の中で私を見ることが出来る者は阿耨多羅三藐三菩提において不退転を得るであろう。東方の諸佛は常に私の所に来たりて宝師子の座に処したまい私のために法を説きたまえり。……』

我念過去。於錠光佛所。出家求道淨修梵行。恭敬供養聞法受持。次於離垢佛所。出家求道淨修梵行。恭敬供養聞法受持。次於妙幢佛。妙德佛。毘樓遮那佛。普眼佛。梵壽佛。自在佛。善天佛。善男子。我於如是等三十六恒河沙佛所。出家求道淨修梵行。恭敬供養聞法受持。⁽⁹⁹⁾私が過去を念いますに、錠光仏⁽¹⁰⁰⁾の所に於て出家求道して、梵行を淨修し、恭敬し供養して、法を聞きて受持しました。次に離垢仏の所に於て出家求道して、法を聞いて受持しました。次に妙幢仏・妙德仏⁽¹⁰¹⁾・功德藏仏⁽¹⁰²⁾・毘盧遮那仏⁽¹⁰³⁾・普眼仏⁽¹⁰⁴⁾・梵壽仏・自在仏・善天仏に於て出家求道しました。善男子よ、私は是の如き等の三十六恒河沙の仏の所に於て、出家求道して、梵行を淨修し、恭敬し供養して、法を聞きて受持しました。即ち、過去世における出家求道の仏果が今日の私の姿をもたらししているとするのである。

善男子。菩薩不爲教化一衆生故發菩提心。不爲教化百衆生。……欲恭敬供養一切諸佛。欲嚴淨一切佛刹。欲守護受持一切佛法。欲滿足一切大願。欲知一切佛眷屬。欲知一切衆生心海。欲知一切衆生心心所行。欲知一切衆生諸根輪。欲知一切世界一切劫數次第成敗。欲知一切衆生煩惱習氣。欲斷一切衆生煩惱。欲滿一切衆生行故發菩提心。⁽¹⁰⁵⁾

『善男子よ、菩薩というものは一人の衆生を教化しようとしての故に菩提心を発すのではない、百の衆生を教化しようとしてのためにでもない。……一切の諸仏を恭敬し供養しようとする願い、一切の仏刹嚴淨しようとする願い、一切の仏法を守護し受持しようとする願い、一切の大願を満足しようとする願い、一切の仏の眷屬を知ろうとする願い、一切衆生の心々の所行を知ろうとする願い、一切衆生の諸根輪を知ろうとする願い、一切の世

界、一切の劫数の次第に成敗することを知らうと願い、一切衆生の煩惱習氣を知らうと願い、一切の衆生の煩惱を断とうと願い、一切衆生の行を満たそうと願うが故に、菩提心を発すのです。』と述べた上で、善財の法門の名はとの問いに

此法門名離憂安穩幢。我唯知此法門。……⁽¹⁰⁶⁾

と答え、よく菩薩の諸行を解説するとして毘目多羅仙人を訪ねよと勧める。休捨優婆夷の教えを受けた善財は、

正念思惟。得菩提難。遇善知識難。得與上人共同止難。得菩薩諸根難。滿足菩薩正直心難。值遇同意善知識難。觀眞實難。如法正教難。出生妙心難。念一切智難。長養法明難。作是念已辭退南行。⁽¹⁰⁷⁾

善財が正念し思惟したのは、「菩提を得ることは難く、善知識に遇うことは難く、上人と共に同じ所にいることができるのは難く、菩薩の善根を得ることは難く、菩薩の正直心を満足することは難く、同じ意志を持つ善知識に値遇することは難く、眞実を観ずることは難く、法の如く正しく教えるのは難く、妙心を出生することは難く、一切智を思ふことは難く、法明を長養することは難しい」と。こう考えた上で、辞退して南に行けり。

漸遊行至海潮國。周遍推求仙人毘目多羅。時彼仙人在大林中。阿僧祇樹莊嚴此林。寶葉普覆。……⁽¹⁰⁸⁾

漸漸に遊行して、海潮國に至り、周遍して仙人毘目多羅を推求せり。時に彼の仙人は大林中に在せり。阿僧祇の樹は此の林を莊嚴し、宝葉普く覆い、……

爾時善財。見彼仙人在此林中。服樹皮衣縈髮草座。一萬仙人以爲眷屬。如栴檀林栴檀圍遶。⁽¹⁰⁹⁾

爾の時に善財、彼の仙人を見たてまつるに、此の林中に在して樹皮の衣を身にまとい、縈髮⁽¹¹⁰⁾して草を座とし、壹萬の仙人を以て眷屬と爲し、林のような栴檀に圍遶されておられる。

時彼仙人。觀察大衆而作是言。汝等當知。此童子者。已發阿耨多羅三藐三菩提心。請一切衆生普施無畏。饒益一切衆生。向深智海。欲飲一切諸佛法雨。欲盡一切法海源底。欲成世間智慧大海。欲興大悲重雲。欲雨甘露法雨。欲出世間明淨智月。欲滅世間諸煩惱闇。欲長養一切衆生善根。⁽¹¹¹⁾

時に彼の仙人、大衆を觀察して、『お前たちよ、當に知るべきである。この童子は已に阿耨多羅三藐三菩提心を発し、一切の衆生に請う

て普く無畏を施して、一切の衆生を饒益し、深智の海に向つて、一切諸仏の法雨を飲みたいと欲し、一切法海の源底を尽そうと欲し、……、一切衆生の善根を長養しようと欲している』との言葉を發した。

この言葉を聞いてその場に居た仙人の大衆は

爾時大衆。各持種種金色妙華香可悅樂。散童子^上。頭面禮足曲躬敬遶。作如是言。此童子者。悉能救護一切衆生。滅三惡道。離閻羅趣一切諸難。消渴欲海除滅苦陰。捨愚癡闇斷貪愛縛。能昇功德金剛圍山。建立世間智慧須彌。於世間出明淨智日。顯曜一切善根諸法。示導世間明識善惡。時彼仙人。告大衆言。若有能發阿耨多羅三藐三菩提心者。得一切智。淨一切佛功德之地¹¹²。

爾の時に大衆は、各々すばらしい種々の金色の妙華香のものを持つて、童子の上に散じ、頭面に足を禮し、躬を曲めて敬遶し、是の如きの言を口にする。

『此の童子悉く能く一切の衆生を救護し、三惡道¹¹³を滅し、閻羅趣¹¹⁴一切の諸々の難を離れさせ、欲の海を消渴して苦陰を除滅し、愚癡の闇を捨て、貧愛の縛を断ち、能く功德の金剛圍山に昇つて、世間に智慧の須彌¹¹⁶を建立し、世間に於て明淨の智月を出だして、一切善根の諸法を顯曜し、世間を示導¹¹⁷して、明らかに善惡を知らせよう。』と。

時に彼の仙人、大衆に告げて言はく、『若し能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す者有れば、一切智を得、一切の仏の功德の地を淨めよう。』

善男子。我已成就菩薩無壞幢智慧法門¹¹⁸。

『善男子よ、我已に菩薩の無壞幢智慧の法門を成就せり。』

善財白言。大聖。彼法門者。境界云何。時彼仙人即申右手摩善財頂。摩已執善財手。即時善財自見其身。在於十方十佛世界微塵等佛所。見彼諸佛相好莊嚴。……¹¹⁹

善財は白した、『大聖よ、彼の法門は境界云何』と。時に彼の仙人は、即ち右の手を伸ばして善財の頂を摩でたまえり。摩で已つて善財の手を執られた。即時に善財自ら其の身を見ると十方の十仏世界の微塵に等しき仏の所に在った。彼の諸佛の相好莊嚴を見たてまつるに、阿僧祇の宝珍玩の具を以て其の刹を莊嚴した。……この仙人の成し遂げている無壞幢智慧法門により善財自身が佛の姿を目の当たりにすることができたのである。

又見彼佛眷屬大海。所從聞法悉能受持。乃至不失一句一味。分別受持正法梵輪。受諸法雲入佛大願。淨修諸力清淨願行。究竟諸功德藏。見彼諸佛。隨應化度。一切衆生。見一切佛清淨圓滿大光明網。見已隨順無礙智慧光明。究竟佛力。或自見身。於一佛所。一日一夜。或復自見於餘佛所。七日七夜。如是次第。於餘佛所。或有半月一月。一歲百歲千歲。或百千歲百千億歲。或百億那由他歲。或半劫一劫百劫千劫百千劫。或百億那由他劫。乃至不可說不可說那由他劫。或閻浮提微塵等劫。乃至不可說不可說世界微塵等劫。⁽²⁰⁾

善財は佛の説法を聞きに來た大衆がその説法を悉く受け取ろうとして一語一句を聞き逃すまいとして耳を敬ており、正法の梵輪を分別受持して諸法雲を受け佛の大願に入り、清淨なる願行の諸力を淨修して諸功德藏を究竟し、彼の諸佛を見て、それぞれに應じて衆生を導き、救われるのを見た。一切の衆生は一切の佛の清淨圓滿なる大光明網を見、見おわってそれぞれが無礙の智慧光明を、つまりは佛の力を、見た。或は自ら佛の姿を見た。善財は一つの佛の所で一昼夜を、また別の佛の所では七日七夜、このように半月一月を過し、……不可說不可說那由他劫もの長時間いるかとさえ感じた。

爾時善財。爲無壞幢智慧法門照故。得明淨藏三昧。無盡法門三昧照故。得遊一切方陀羅尼光明。金剛圓滿光明法門照故。得分別智意樓閣三昧。住平地莊嚴法藏般若波羅蜜精進照故。得佛虛空藏三昧光明。一切諸佛法輪三昧光明相照故。得三世圓滿智無盡光明。⁽²¹⁾

この時に善財は無壞幢智慧によって明淨藏三昧を体得し、無盡法門三昧によって、遊一切方陀羅尼光明を体得し、金剛圓滿光明法門によって分別智意樓閣三昧を体得し、住平地莊嚴法藏般若波羅蜜精進のよって佛の虚空藏三昧光明を体得し、一切諸佛法輪三昧光明相のよって、三世圓滿智無盡光明を体得したのであった。

これまでは善知識が三昧に入るのを見ていただけであつたが、毘目瞿沙仙人の導きによつて善財自身が明淨藏三昧をはじめとする諸三昧を体得・体験することになったのである。

時彼仙人放善財手。爾時善財即自見還在本處。時彼仙人問善財言。汝憶念耶。答唯然。大聖。善知識力故。善男子。我唯知此菩薩無壞幢智慧法門。我豈能知大菩薩行。⁽²²⁾

時に彼の仙人、善財の手を放した。爾の時に善財、即ち自ら身を見るに還つて本處⁽²³⁾に在った。時に彼の仙人、善財に問いて言はく、『汝憶念するや』。答えて曰はく、『唯然り、大聖の善知識力の故に』と。『善男子よ、私は唯此の菩薩無壞幢智慧の法門を知るだけです。私が

どうして能く大菩薩の行を知ることができようか。……」更に深くは方便命という婆羅門にお尋ねなさいと勧告した。この勧告に従って方便命婆羅門に会おうとする。

(念善知識) 漸漸遊行至進求國。周遍推求彼婆羅門。時婆羅門。修諸苦行求一切智。四面火聚猶如大山。中有刀山高峻無極。從彼山上自投火聚。⁽²⁴⁾

善知識の教えを念じながらしばらく遊行して進求國まで来て、あたりを見まわして彼の婆羅門を探し求めた。婆羅門は諸々の苦行を修して一切の智を求めており、高峻な刀の如き山から燃え盛る火中にその身を投じるといふ修行をしていた。……

善男子。汝今若能登此刀山投火聚者。菩薩諸行皆悉清淨。爾時善財。作如是念。得人身難。離諸難難。得無難難。得淨法難。值佛世難。具諸根難。聞佛法難。遇善知識難。遇善知識難。得與同止難。得聞正教難。得正命難。順趣正法難。此將非魔魔所使耶。非善知識而現善知識相。將非惡菩薩耶。而今爲我作壽命難。作善根難。薩婆若難。此非正教險惡道耳。遠離法門薩婆若等一切佛法。⁽²⁵⁾

『善男子よ、お前が今若し此の刀の如き山に登り、火聚に投ぜば菩薩の諸行は皆悉く清淨ならん。』

爾の時に善財は、このように考えた、『人身を得ることは難く、諸難を離れることは難く、無難を得ることは難く、淨法を得ることは難く、佛世に値ふことは難く、諸根を具することは難く、佛法を聞くことは難く、善知識に遇うことは難く、善知識と与に同じ立場に立つことは難く、正教を聞くことを得るは難く、正法に順趣するは難い。此れ將た魔または魔の使う所でないのか。善知識でなくて而も善知識の相を現しているのか。將た惡菩薩でないのか。而も今我が為に寿命の難を作し、善根の難、薩婆若の難を作す、此れ正しき教えではなくて險惡の道なるのみ。法門薩婆若等の一切の佛法を遠離している』と。

作是念時。十萬梵天在虛空中。作如是言。善男子。莫作是念。莫作是念。此是大聖。具足金剛智慧光明。精進不退。悉已究竟一切境界。欲竭一切衆生貪愛大海。欲裂一切諸邪見網。欲燒一切煩惱。除滅愚闇普照一切。令一切衆生離生死險難。除滅三世愚癡闇冥。放淨光明普照一切。⁽²⁷⁾

是(「此れ正しき教えに非ずして險惡の道なるのみ。法門薩婆若等の一切の佛法を遠離せり」の念を作せる時、虚空中の十万の梵天は、次のように言った、

『善男子よ、そんなことは考えてはならない。そんなことは考えるな。此の人は大聖なり。金剛智慧の光明を具足し、精進して退かず、悉く已に一切の境界を究竟して、一切衆生の貧愛の大海を竭そうと願ひ、一切諸々の邪見の網を裂こうと願ひ、一切衆生の煩惱を焼き、愚闇を除滅して、普く一切を照らし、一切の衆生をして生死の險難を離れさせ、三世の愚癡闇冥を除滅し、淨光明を放つて普く一切を照らそうと願つておられる』と。

時諸梵天及自在天。衆生主天等諸邪見天。作如是言。我造衆生。我爲一切世間最勝。我爲最上。我爲第一。是諸天等。見婆羅門修大苦行。五熱炙身。見如是已。各於諸禪不得滋味。來詣其所。時婆羅門。以自在力而爲說法。令滅邪見捨離我心。發大慈悲普覆衆生。長養菩提正直之心。開四種道求佛法身。隨所應化悉能示現。佛微妙音一切悉聞無有障礙。⁽²⁸⁾

時に諸々の梵天、及び自在天、衆生主天等の諸々の邪見を抱く天の中には、

『我は衆生を造つた、我はその爲一切世間の最勝なり、我は最上なり、我は第一なり。』と嘯くもののいたが、そうした彼らでさえ、婆羅門が大苦行を修して、五熱に身を炙ることを見て、各々諸修行では確たる果を得ることが出来なかった者が、この婆羅門の所にやつて来たのである。婆羅門は自在力を以て、説法して、邪見を滅し、我心を捨離し、大慈悲を發して普く衆生に行きとどかせ、菩提正直の心を長養し、四種の道を開きて、佛の法身を求め、所應化に随ひて悉く能く示現し、佛の微妙の音は一切悉く聞いて障礙のないものであることを解き明かした。

復有一萬魔。在虛空中。以種種摩尼寶華散婆羅門。告善財言。善男子。此婆羅門苦行力故。放大光明。令我宮殿諸莊嚴具悉如聚墨。我不復樂。即與無量諸天天女眷屬圍遶來詣其所。爲我說法。悉於阿耨多羅三藐三菩提得不退轉。⁽²⁹⁾

復た虚空中の一萬の魔は、種々の摩尼寶の華を、婆羅門に散じ、善財に告げて言はく、

『善男子よ、此の婆羅門は苦行の力の故に、大光明を放ち、我が宮殿、諸々の莊嚴具をして、悉く聚墨の如くならしめ、我復た樂まず、即ち無量の諸天、天女眷屬の仲間を圍遶せられ、來つて其の所に詣でたるに、我が爲に法を説き、悉く阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退転を得させられた』と。……

爾時善財童子。聞奇特法。心大歡喜。於婆羅門所。發起眞實善知識心。頭面禮足。如是白言。向疑聖教。違知識教。唯願大聖。受我悔

過。時婆羅門。爲善財童子。而説偈言

欲求菩提者 當順知識教 除滅諸疑惑 一心常恭敬 修習於正道 知法眞實相 安住於道場 成就佛菩提⁽¹³⁰⁾

爾の時に善財童子は、奇特の法を聞きて、心大いに歡喜し、婆羅門の所に於て、眞實の善知識の心を發起し、頭面に足を禮し、是の如く白して言さく、

『向（さき）に聖教を疑い、知識の教えに違つてしまった。唯願はくは大聖、我が悔過を受けたまえ。』

時に婆羅門、善財童子の為に偈を説きて言はく、

『菩提を求めんと欲する者は、當に知識の教えに順ひ、諸々の疑惑を除滅して、一心に常に恭敬すべし。正道を修習し、法の眞實相を知らば、道場に安住して、佛の菩提を成就するであろう。』と。ここに知識の宗教としての仏教が明確に語られているのである。

爾時善財童子。即登刀山自投火聚。未至中間。即得菩薩安住三昧。既至火燄。復得菩薩寂靜安樂照明三昧。得三昧已。白言。甚奇。大聖。如是刀山及大火聚。我身觸時安穩快樂⁽³¹⁾。

爾の時に善財童子は、即ち刀の如き山に登りて、自ら火聚に投じ、未だ中間に至っていないのに即ち菩薩の安住三昧を得た。既に火聚に至れば、復た菩薩の寂靜にして安樂なる照明三昧を得已つて、白して言さく、

『甚だ奇なり、大聖よ、是の如きの刀の如き山、及び大火聚も、我が身に觸れる時、安穩にして快樂なり。』

善財自ら、刀の如き山での火中への投身が、安穩であるばかりでなく快感さえも味わうのである。

こうして善財は婆羅門の導きによつて安住三昧と照明三昧を体得したのである。

時婆羅門。告善財言。善男子。我唯成此菩薩無盡法門。明淨法王諸菩薩行。滿足諸願。悉滅衆生煩惱邪見。得不退轉。不可盡心。離解

怠心。一切無畏。得金剛那羅延藏。究竟大境界。無有疲倦。遠離諸垢。不動如風輪。精進不退。以大莊嚴而自莊嚴。饒益衆生。如是法門。

我當云何能知能説。⁽¹³²⁾……

時に婆羅門、善財に告げて言はく、

『善男子よ、私は唯此の菩薩の無尽法門を達成しただけである。法王諸菩薩の行を明淨にし、諸々の願を満足し、悉く衆生の煩惱邪見を滅

し、不退転、不可尽の心得て、懈怠の心を離れ、一切畏れること無く、金剛那羅延蔵を得て、大心の境界を究竟し、疲倦有ること無く、諸垢を遠離し、動ぜざること風輪の如く、精進して退かず、大莊嚴を以て自ら莊嚴し、衆生を饒益している。このような法門は、私如きの者がどうして能く知り能く説くことができるか。……』として、彌多羅尼という名の童女に尋ねるよう勧める。この勧告に従って善財は師子奮迅城へと足を進める。彌多羅尼はいずこにおわすかと宮門で尋ねると、宮殿内で説法されているという。

爾時善財。作如是念。此王宮門。自在出入無所障礙。善財即入。見彼女人。處在明淨寶藏法堂。地玻瓈色。瑠璃爲柱。金剛爲壁。閻浮檀金欄楯窓牕。光明普照。阿僧祇摩尼寶而莊校之。又千寶藏摩尼寶鏡圓滿莊嚴。衆生所樂明淨妙寶。以爲嚴飾。又阿僧祇摩尼寶網。羅覆其上。百千金鈴出微妙音。有如是等不可思議衆寶校具。莊嚴講堂。見彼女人。身如眞金。目髮紺色。處淨水香寶師子座。覆以金網。敷衆寶衣。大衆圍遶。以梵音聲而爲說法。⁽¹³³⁾

善財はこの王宮門は往來が自由に許されていると考えながら、中に入り、彼の女人を見た。明淨寶藏法堂におられ、法堂の地は玻瓈色であり、瑠璃を柱とし、壁は金剛でできており、閻浮檀金⁽¹³⁴⁾で作られた欄楯⁽¹³⁵⁾と窓牕⁽¹³⁶⁾の光明はいたる所を照らしている。……彼の女人を見れば、身は眞金の如く、目と髪は紺色で、金の網で覆われた、淨水香の師子座に寶衣を敷いて、大衆に取り囲まれて坐っておられ、梵音聲で説教されておられた。

爾時善財。見一一瑠璃柱中。一一金剛壁中。一一摩尼鏡中。一一形像中。一一寶中。一一莊嚴中。一金鈴中。一一寶樹中。一一寶形像中。一一寶瓔珞中。悉見法界等一切如來。從初發心。修菩薩行。成滿大願。功德莊嚴。成等正覺。轉淨法輪。乃至示現無餘涅槃。如淨水中見月影像。善財童子。於一切境界莊嚴具中。見一切佛。從初發心。乃至示現無餘涅槃。亦復如是。皆是彼女過去善根依果力故。⁽¹³⁸⁾

この時に善財は一一の瑠璃の柱の中に、一一の金剛の壁の中に、……菩提心を発し、菩薩行を修め、大願を成満し、功德の莊嚴であり、等正覺を成し、淨法輪に轉じ、無余の涅槃を示現し給える如來を、水に映った月影のように、見た。善財は、一切の境界の莊嚴なる道具の中に、一切佛を、菩提心を起こした時から涅槃を示現し給えるに至るまでの姿を見たのである。皆是、彼の女の過去の善根の果に依る力の故なりと彼女の善根の果を讚美したのである。

善男子。是般若波羅蜜普莊嚴法門。我於三十六恒沙佛所。修此法門。彼諸如來各以異門。令我入此般若波羅蜜普莊嚴法門。⁽¹³⁹⁾

『善男子よ、是れ般若波羅蜜普莊嚴の法門なり。我三十六恒河沙の佛の所に於て此の法門を修せり。彼の諸々の如来は、各々異門を以て我をして此の般若波羅蜜普莊嚴法門に入らされたのである。』

善男子。我入此法門。正念思惟。分別受持。生平等時。得普門陀羅尼等百萬阿僧祇陀羅尼門。……⁽¹⁴⁰⁾

『善男子よ、私は此の法門に入りて、正念し思惟し、分別し受持して平等を生ぜし時、普門陀羅尼等の百萬阿僧祇の陀羅尼門を得て、以て眷屬と為せり。……

善男子。我唯知此般若波羅蜜普莊嚴法門。……⁽¹⁴¹⁾

善男子よ、私は、唯此の般若波羅蜜普莊嚴法門を知るのみ。これ以上のことは善現比丘に教えを請いなさいとの勧告した。ここまでの善財の旅はさとりへの階段で考えれば十住の段階を終えたこととなる。

漸漸遊行至救度國。於城都聚落村邑市里。仙人住處山林曠野。周遍推求善現比丘。見彼比丘在林經行。形貌端嚴顏容姝妙。其髮右旋如紺青色。……⁽¹⁴²⁾

……遊行して救度國に至り、城都・村邑・聚落・市里・仙人の住んでおられる処の山林曠野にて善現比丘を探し求め、比丘が、林におられて經行⁽¹⁴³⁾されておられるのを見た。姿は端正で氣品があり、見目麗しい顔立ちをされており、其の髪は紺青色で右巻きであった。……

善男子。我年既少出家日近。自我生來。於三十八恒沙佛所。淨修梵行。或於一佛所。七日七夜淨修梵行。或餘佛所。半月一月。一歲百歲。億那由他歲。乃至不可說不可說歲。或一小劫半劫一劫。或阿僧祇劫。乃至不可說不可說阿僧祇劫。淨修梵行。彼諸佛所。聞法受持。

不違其教。莊嚴諸願。究竟淨修菩薩諸行。具足六波羅蜜。知菩提境界。知種種法輪。守護佛法。乃至正法滅盡。嚴淨一切諸佛世界。出生三昧大願力故。究竟菩薩一切淨行。出生菩薩一切行願力故。淨一切佛諸波羅蜜。出生普賢諸行力故。善男子。我不離此經行處。悉見十方智慧無礙故。一切法界。悉現在前。於一念中。過不可說不可說諸世界故。於一念中。嚴淨不可說諸佛世界。出生大願力故。⁽¹⁴⁴⁾

『善男子よ、私はまだ年少であり出家してからの日も浅い者ですが、生まれてこのかた、三十八恒河沙の佛の所に於て、梵行を淨修してまいりました。或は一佛の所で七日七夜梵行を淨修し、或は別の佛の所にて半月一月、一歲百歲、那由他歲、乃至不可說不可說、或は一小劫、半劫一劫、或は阿僧祇劫、乃至不可說不可說の阿僧祇劫に梵行を淨修しました。彼の諸佛の所にて法を聞いて受持し、其の教に違わ

ないよう、諸々の願を莊嚴し、窮境して菩薩の諸行を淨修し、六波羅蜜を具足して、菩提の境界を知り、種々の法輪を知り、佛法を守護して、乃至正法を滅尽するようになりました。大願力よって、一切の諸佛の世界を嚴淨し、三昧を出生しました。菩薩の一切の行を生み出す願力よって、菩薩の一切の淨行を究竟しましたし。普賢の諸行を出生する力よって、一切の佛の諸波羅蜜を淨めました。善男子よ、智慧無礙なるが故に、私は此の經行の処を離れずして悉く十方を見ることが出来ます。一念の中に於て不可説不可説の諸々の世界を過ぐるが故に、一切の法界は悉く現前にあります。大願力を出生するが故に、一念の中に於て不可説不可説の諸佛の世界を嚴淨します。十力智を具して普賢菩薩の行願力を出生するが故に、不可説不可説の衆生の方便門は悉く現前にあります。……

善男子。我唯知此隨順菩薩燈明法門。⁽¹⁴⁵⁾

善男子よ、私は唯此の隨順菩薩燈明の法門を知っているだけです。

時善財童子。專求菩薩莊嚴正道。菩薩諸力照心修行。菩薩無壞無盡諸功德行。成滿菩薩堅固大願。以大莊嚴而自莊嚴。一切無畏。不退堅固正直之心。受持一切菩薩行雲。受持菩薩正法之雲。而無厭足。恭敬一切菩薩功德。攝取一切衆生。常欲超出生死曠野。樂欲見聞恭敬親近。於善知識心無厭倦。體面禮足恭敬無量。隨順教誨辭退南行。⁽¹⁴⁶⁾

時に善財童子は、専ら菩薩の莊嚴正道を求め、菩薩の諸々の力は心を照らし、菩薩の無壞無盡の諸々の功德の行を修行し、菩薩の堅固なる大願を成滿し、大莊嚴を以て而も自ら莊嚴し、一切畏れること無くして、堅固なる正直の心を退かず、一切菩薩の行雲を受持し、菩薩の正法雲を受持して厭き足ること無く、一切の菩薩の功德を恭敬し、一切の衆生を攝取し、常に生死の曠野を超出せんと願い、善知識を見聞し、恭敬し、親近せんことを樂いて、心に厭倦無く、頭面に足を礼して、恭敬すること無量にして、教誨に隨順し、辞退して南に行けり。次に善財童子が尋ねたのは釋天主童子である。

爾時善財童子。與天龍大衆眷屬圍遶。至輸那國。周遍推求釋天主童子。時虛空中有諸天龍。而告之曰。善男子。此童子。在善域門外河水之側。⁽¹⁴⁷⁾

爾の時に善財童子は、天龍の大衆眷屬に圍遶せられて輸那國に至り、釈天主童子を探し求めた。時に虚空の中に諸々の天龍有りて之に告げて曰はく、『善男子よ、此の童子は善域の門外、河水の側に在す。』と。

爾時善財。見釋天主與一萬童子弄沙嬉戲。即詣其所。頭面禮足遶無數匝。合掌恭敬於一面住。白言大聖。我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何學菩薩行。修菩薩道。唯願解說。⁽⁴⁸⁾

爾の時に善財は、釋天主が、一万の童子とともに、沙を弄びて嬉戲したまうを見て、即ち其の所に詣でて、頭面に足を礼し、遶ること無數回、合掌して恭敬して、一面に於て住し、白して言さく、『大聖よ、私は已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を発しましたが、而も未だ菩薩は云何が菩薩の行を学び、菩薩の道を修するやを知らず。唯願わくは解説して頂きたく存じます。』

善男子。文殊師利。教我相繫子法。算數法。印法我因知此三種法故。得一切巧術智慧法門。善男子。我因此法門故。知繫子算數印性。疾病中毒。爲鬼所著。諸魔所持。悉能消伏。立大小城都邑聚落善惡之相。田業商估一切衆生身肢節相。善趣惡趣行業之相。知此衆生之於善趣。知此衆生之於惡趣。此聲聞。此緣覺。此如來地。諸方便相。如是等事我悉了知。普令衆生修學此法。復次善男子。我亦了知菩薩算數之法。所謂百千爲一羅叉。百千羅叉爲一拘利。百千拘利爲一那由他。廣說如阿僧祇品。善男子。若有無量百由旬等大沙聚。我悉分別算知其數。善男子。如算法能知沙聚。算知東方一切世界。南西北方四維上下亦復如是。算知一切世界中。一切劫。一切佛。一切法。一切菩薩。一切業。算數了知。一切世界中。一切四諦名號。亦復如是。善男子。我唯知此巧術智慧法門。諸大菩薩深入一切算數法門。……⁽⁴⁹⁾

『善男子よ、文殊師利は、私に相繫子の法・算数の法・印の法を教えられました。私は、此の三種の法を知ること、一切の巧術智慧の法門を得ました。善男子よ、私は、此の法門に因るが故に、繫子・算数・印性を知りました。疾病・中毒・鬼に取り著かれ、諸魔によりつかれても、悉く能く消伏しました。大小の城・都邑・聚落に浮かび上る善惡の相、田業・商估・一切衆生の身肢節の相、善趣惡趣の行業の相から、此の衆生の善趣にゆくことを知り、彼の衆生の惡趣にゆくことを知りました。これは声聞、それは緣覺、あれは如來地、諸々の方便相、こうした事を、私は悉く了知し、普く衆生に此の法を修学させました。復た次に善男子よ、私は亦菩薩の算数の法を了知しました。所謂、百千を一羅叉と爲し、百千羅叉を一拘利と爲し、百千拘利を一那由他と爲し、広く説くこと阿僧祇品の如し。善男子よ、若し無量百千由旬に等しき大沙聚有るも、私は悉く分別して其の数を算知するだろう。善男子よ、算法の能く沙聚を知り、東方の一切世界を算知するが如く、南西北方四維上下も亦復た同様です。一切世界の中に一切の劫・一切の佛・一切の菩薩・一切の業を算知します。一切世界の中に一切の四諦の名号を、算數し了知することも、亦復た同様です。善男子よ、私は唯此の巧術智慧法門を知るだけです。諸々の大菩薩は深く

一切の算数の法門に入つて、一切の法を算数し、……釋天主童子は善財に自在優婆夷を尋ねるよう勧告する。

漸漸遊行至海住城。周遍推求自在優婆夷。時有人言。善男子。此優婆夷。在此城中深宮之内。善財聞已。往詣宮門敬心而立。彼優婆夷所住之處。廣博嚴飾。衆寶垣牆。周匝圍遶。⁽¹⁵⁰⁾

漸漸に遊行して、海住城に至り、周遍して自在優婆夷を推求した。時に人有り、言はく、『善男子よ、此の優婆夷は此の城中の深宮の内に在す』と。

善財聞き已つて、往きて宮門に詣り敬心して立てり。彼の優婆夷の所住の所は、広博であつて嚴飾され、衆寶の垣牆は周りを取り囲んでいる、……

善男子。我成就無盡功德藏莊嚴法門。以一器食施百衆生。隨其所欲皆得充滿千衆生。百千衆生。億衆生。千億衆生。百千億衆生。那由他衆生。百那由他衆生百千那由他衆生。乃至不可說不可說衆生閻浮提微塵等衆生。乃至不可說不可說佛刹微塵等衆生。隨其所欲皆悉充滿而無損減。又復施與上味美膳輦輿衣服華鬘妙香末香塗香寶莊嚴具。又施床座車乘妙蓋幢幡。如是等種種諸物。隨其所欲悉令充滿皆大歡喜。⁽¹⁵¹⁾

『善男子よ、私は無盡功德藏莊嚴の法門を成就し、一器の食を以て百の衆生に施し、其の所欲に隨つて皆充滿を得させ、千の衆生、百千の衆生、億の衆生、千億の衆生、百千億の衆生、那由他の衆生、百千那由他の衆生、乃至不可說不可說の衆生、閻浮提の微塵に等しき衆生、乃至不可說不可說の佛刹の微塵に等しき衆生に、其の所欲に隨つて皆悉く充滿せしめて而も損減無し。又復た上味の美膳・輦輿・衣服・華鬘・妙香・末香・塗香・宝莊嚴具を施与し、又牀座・車乘妙蓋・幢幡を施し。是の如き等の種々諸々の物を、その所欲に隨つて悉く充滿せしめ、皆大いに歡喜した。……』

善男子。我唯得此無盡功德藏莊嚴法門。……⁽¹⁵²⁾

『善男子よ、私は唯此の無盡功德藏莊嚴の法門を得るのみです。……更に善財は優婆夷の勧めにより甘露頂長者を訪れる。』

爾時善財童子。得無盡功德光明法門。正念思惟彼功德海。觀察彼虛空功德。趣彼功德聚。登彼功德山。攝彼功德藏。盡彼功德底。度彼功德海。淨彼圓滿功德。周遍觀察彼諸功德。隨彼功德藏。持彼功德教。淨彼功德性。漸漸遊行至大興城。周遍推求長者甘露頂。樂求善知識。以善知識熏其身心。於善知識起正直心。觀善知識常無厭足。學善知識勇猛精進。求善知識一切善根。同善知識一切善根。於善知識無

嫌恨心滿功德藏⁽¹⁵³⁾

爾の時に善財童子は、無尽の功德光明の法門を得て、正念に彼の功德海を思惟し、彼の虚空のごとき功德を觀察し、彼の功德聚に趣き、彼の功德山に登り、彼の功德藏に摂して、彼の功德の底を尽くし、彼の功德の海を渡り、彼の円満なる功德を淨め、周遍して諸々の功德を觀察し、彼の功德藏に随い、彼の功德の教を持し、彼の功德の性を淨め、漸漸に遊行して、大興城に至った。周遍して長者甘露頂を探し求め、善知識を樂ひ求め、善知識を以て其の身心に熏じ、善知識に於て正直心を起こし、善知識を觀じて常に厭き足ること無く、善知識を學んで勇猛精進し、善知識の一切の善根を求め、善知識の一切の善根に同うし、善知識に於て嫌恨の心無く、功德藏を満たし、……

爾時善財。見甘露頂。於彼城内。處七寶堂阿僧祇寶師子座上。金剛伊尼羅寶以爲座足。離垢寶藏而以校飾。五百寶像以爲莊嚴。建衆寶幢。垂衆幡繒。張衆寶帳。無量寶網羅覆其上。有人手執闍浮檀金蓋。瑠璃爲竿。復有執持離垢寶佛。侍立而左右。衆妙雜香而以熏之。雨天華雲。作五百種勝妙妓樂。娛樂城内。一萬大衆周匝圍遶。顏容殊妙天人無倫。成就菩薩直心。莊嚴衆生。悉常隨順甘露頂教。宿世同修諸善根故。爾時善財。頭面禮足遶無數匝。恭敬合掌於一面住。……⁽¹⁵⁴⁾

爾の時に善財、甘露長を彼の城内に見たてまつるに、七宝堂の阿僧祇寶師子の座上におられ、金剛伊尼羅寶を座足と爲し、離垢の宝藏で裝飾し、五百の宝藏で莊嚴に飾り、衆の宝幢を建て、宝の繒幡を垂れ、衆寶の帳を張り、無量の宝網を其の上に羅覆している。手に闍浮檀金の蓋を獲っている人がおり、瑠璃を竿としている。復た離垢の宝仏を持つてゐるものがいて、左右に侍立し、衆妙の雜香を熏じ、天華の雲を雨降らし、五百種の勝妙なる妓樂をなして娛樂せり。城内の一万の大衆は周りを取り囲んでいる、端正なお顔立ちで天人にも類が無く、菩薩の直心の莊嚴を実現しており、衆生は悉く常に甘露頂の教に随順していた。宿世に同じく諸々の善根を修したが故なり。爾の時に善財、頭面に足に禮し、めぐること無数回、恭敬し合掌して、一面に於て住し、……

我本爲彼說種種法。令發阿耨多羅三藐三菩提心。生如來家修白淨法。滿足無量諸波羅蜜。具佛十力。離世間姓立如來姓。壞生死輪轉法輪。滅三惡道立正法趣。善男子。當知菩薩悉能救護一切衆生。善男子。我成就此如意功德寶藏法門。隨其所須悉滿彼願。謂以衆寶車乘象馬僮僕。衣服飲食香華末香。燈明湯藥幢幡繒蓋。隨意眷屬天冠寶飾。一切珍玩資生之具。盡給施之。乃至以法廣施衆生。……⁽¹⁵⁵⁾

『我、本より彼の為に種々の法を説いて、阿耨多羅三藐三菩提心を發させ、如來の家に生れ、白淨の法を修し、無量の諸波羅蜜を満足し

て、佛の十力⁽¹⁵⁶⁾を具え、世間の姓を離れて如来の姓を立て、生死の輪をやぶって淨法輪を転じ、三惡道を滅して正法趣に立てさせた。善男子よ、当に知るべし、菩薩は悉く能く一切の衆生を救護される。善男子よ、我此の如意功德宝藏の法門を成就して、其の求める所に随って悉く彼の願を滿ぜしむ。謂ゆる、衆寶の車乘・象馬・僮僕・衣服・飲食・香華・末香・灯明・湯藥・幢幡・繪蓋・随意的眷屬・天冠・宝飾・一切の珍資生の具を以て、尽く給施し、乃至法を以て広く衆生に施された。……』

善男子。我唯知此如意功德寶藏法門。……⁽¹⁵⁷⁾

『善男子よ、私は唯此の如意功德宝藏の法門を知るのみである。……』

(善財) 作如是念。因善知識。得一切智。於善知識。生無壞心。聞善知識教。悉能隨順。調伏諸根。⁽¹⁵⁸⁾

(善財は) 次のように考えた。『善知識に因って一切智を得、善知識に於て無壞の心を生じ、善知識の教を聞きて、悉く隨順して諸根を調伏せり』と。善財は甘露頂長者の勧めにより法寶周羅長者を尋ねる。

漸漸遊行至於彼城。周遍推求長者法寶周羅。於道遇見。頭面禮足。合掌恭敬。……⁽¹⁵⁹⁾

漸漸に遊行して彼の城に至り。あたりを見回して長者法寶周羅を探し求めると、道で偶然出会ったので、頭面に足を禮し、合掌して恭敬して、……』

時彼長者。執善財手。將歸其家。善男子。且觀我家。⁽¹⁶⁰⁾

時に彼の長者、善財の手を執り、其の家に帰れり。『善男子よ、しばらく我が家を見よ』と。

爾時善財。遍觀舍宅。悉閤浮檀金色。七寶爲牆周匝圍遶瑠璃莊嚴。碑礪爲柱。敷亦赤眞珠寶師子座。建師子寶幢。張瑠璃寶帳。如意珠網羅覆其上。阿僧祇寶而莊嚴之。碼碯寶池。八功德水盈滿其中。一切寶樹周匝圍遶。其宅廣大十重八門。爾時善財。見最下重。設衆肴膳。惠施一切。見第二重。施雜寶衣。……見第十重。一切如来充滿其中。從初發心修菩薩行。超出生死滿足大願。神力自在。一切佛刹及其眷屬。轉淨法輪化度衆生。顯現住持。⁽¹⁶¹⁾

善財は彼の館を隈なく觀察した。金色に輝き、七宝で垣根を巡らし、瑠璃で莊嚴に飾られ……その宅は広大で十層建てであり、一階には諸々の肴膳がしつらえてあり、二階には衣裳があり、……十階には一切の如来が、初發心から菩薩行を修し、生死を超出し大願を滿足し、

神力を自在にする佛刹があり、佛の弟子たちがいて淨法輪に転じて衆生を化度して住持を顕現していた。即ちこの十層の館は菩薩の修行の階梯（ここでは十地が該当する）を暗示するものであった。

善男子。我憶過去。無量光明法界普莊嚴王如來應供等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。出興于世。彼佛入城。我以香華妓樂。而供養之。供養已。持此善根廻向三處。謂滅除貧苦。常見諸佛菩薩及善知識。恒聞正法故獲斯報。善男子。我唯知此滿足大願法門。諸大寶海菩薩。得不可壞清淨法身。不可壞法雲普覆一切。……⁽¹⁶³⁾

『善男子よ、私が過去を憶うに、無量光明法界普莊嚴王如來・応供・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊、世に出興なされ、彼の佛、城に入られた時に、私は香華妓樂を以て供養いたしました。供養しおわって此の善根を持って三処に回向しました。謂ゆる貧苦を除滅し、常に諸佛菩薩及び善知識を見たてまつり、恒に正法を聞こうとしました。故に斯の報を得たり。善男子よ、私は唯此の大願を満足する法門を知るのみです。諸々の大宝海菩薩は不可壞の清淨の法身と、不可壞の法雲とを得て普く……更なる教えは普眼妙香長者にお尋ねなさいと勧められて善財は普門城を目指す。

見普眼妙香長者。於此城中坐衆香座。……⁽¹⁶⁶⁾

普眼妙香長者は此の城中に於て衆香の座にお坐りになりました。……

善男子。我知一切衆生病。風寒熱病。及諸雜病狂橫病。鬼著病。毒病。諸呪術病。如是等類。一切諸病我悉了知。隨其所應皆能療治。善男子。十方衆生諸有病者。來詣我所。我悉能治。除其患已。沐浴香湯。香華瓔珞。名衣上服而莊嚴之。肴膳飲食而供養之。無量珍寶而惠施之。然後爲說種種法門。貪欲多者教不淨觀。瞋恚多者教慈心觀。愚癡多者教法相觀。等分行者教勝法門。稱揚讚歎諸佛功德。發菩提心故。說長養大悲。於無量生死苦。心不厭故。分別廣說諸波羅蜜。長養無量淨智慧故。說諸大願。教化成熟一切衆生故。說普賢菩薩行。……善男子。我以如是等種種法施。悉令滿足歡喜而還。⁽¹⁶⁷⁾

『……善男子よ、私は一切衆生の病を知っている。風寒熱病、及び諸々の雜病・狂橫病・鬼著病・毒病・諸々の呪術病、是の如き等の類の一切の諸病を、我悉く了知し、其の所應に随つて皆能く療治す。善男子よ、十方の衆生の諸々の病有る者は、私の所に詣でたなら、私は悉く能く治すでしょう。……然して後に種種の法門を説き、貪欲多き者には不淨觀を教え、瞋恚多き者には慈心觀を教え、愚癡多き者には

法相觀を教え、等分行の者には勝れたる法門を教え、諸佛の功德を稱揚し讃歎す、菩提心を發させようとするが故に。大悲を長養することを説く、無量の生死の苦に心厭くことがないが故に。諸々の波羅蜜を分別し広説す、無量の淨智慧を長養させようとするが故に。諸々の大願を説く、一切の衆生を教化し成就させようとするが故に。普賢菩薩の行を説く。……善男子よ、私は是の如き等の種々の法施を以て、悉く満足し歡喜せしめて還そうとするのです。』と応病與藥、⁽⁶⁸⁾應機接物⁽⁶⁹⁾とか対機説法⁽⁷⁰⁾とかといわれる釈迦の教育法を再現しているものである。

善男子。我又善知和衆香法。……所謂救護一切衆生。嚴淨一切佛刹。恭敬供養一切諸佛。乃至燒一丸香時。充滿十方一切法界。一切如來及其眷屬。香帳莊嚴一切法界香。……⁽⁷¹⁾

善男子よ、私は又善く衆多の香を調合する法を知っている。……所謂一切の衆生を救護し、一切の佛刹を嚴淨し、一切の諸佛を恭敬し供養し、乃至一丸の香を焼く時は、十方一切の法界の一切の如來、及び其の眷屬に充滿し、香帳をもつて一切の法界を莊嚴するであらう。

……

善男子。我唯知此令一切衆生歡喜普門法門。見一切佛身。……⁽⁷²⁾

善男子よ、私は唯此の一切衆生をして歡喜させる普門の法門を知り、一切の佛身を見たてまつるのみである。……更に善財は普眼長者の勧めを受け入れ満足王を訪ねようとして足を滿幢城に向ける。

漸經人衆城邑聚落。至滿幢城。問滿足王今在何所。有人答言。今在正殿。行於王法教化衆生。應攝取者而攝取之。應罰者罰。應治者治。諸有諍者斷其諍訟。有恐怖者施以無畏。讃歎不殺。不盜。不邪婬。不妄言。不兩舌。不惡口。不無義語。無貪恚癡。爾時善財。遙見彼王處金剛師子座。阿僧祇寶而以莊殿。無量寶像以爲莊飾。種種香雲而普熏之。無量寶衣以敷其上。……⁽⁷³⁾

……漸らく人衆の城邑聚落を経て、滿幢城に至り、『滿足王は今何れの所におられますか』と問うと、人が答えて言うには、

『今は正殿に在して王法を行い、衆生を教化して、まさに攝取すべき者は之を攝取し、まさに罰すべき者は罰し、まさに治すべき者は治し、諸々の諍有る者は其の諍訟を判決を下し、恐怖している者には畏れる必要はないとし、不殺・不盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不無義語・無貪恚癡を讃歎されておられます』と。

爾の時に善財、遙かに彼の王、金剛の師子座にお坐りになられているのを見るに、阿僧祇の宝を以て莊嚴し、無量の宝像を以て莊飾と為

し、種々の香雲をもつて普く之に熏じ、無量の宝衣を以て其の上に敷いておられた。……

爾時善財。作如是念。我爲一切衆生故。學菩薩行修菩薩道。今見此王。行大惡逆諸不善法。此乃惡中之惡。第一惡人。作是念時。虛空有天。而告之曰。善男子。汝當憶念普眼妙香善知識教。善財即時仰觀虛空。而答之言。我常憶念。天又語言。若常憶念。何故疑怪。善男子。菩薩方便不可思議。菩薩智慧不可思議。攝取衆生不可思議。調伏衆生不可思議。教化衆生不可思議。愍念衆生不可思議。度脫衆生不可思議。⁽¹⁷⁴⁾

爾の時に善財は次のように思った、『私は一切の衆生の為に、菩薩の行を学び、菩薩の道を修している、今此の王を見るに大惡逆にして、諸々の不善の法を行なう、此れ乃ち惡中の惡にして第一の惡人なり』と。こう考えていると、虛空の天が、善財に告げていう、『善男子よ、お前は當に普眼妙香善知識の教を憶い起すべきです』と。

天又語りて言はく、『若し常に憶念しているのなら、何故に疑い怪しむのか、善男子よ、菩薩の方便は不可思議なり、菩薩の智慧は不可思議なり、衆生を攝取すること不可思議なり、衆生を調伏すること不可思議なり、衆生を教化すること不可思議なり、衆生を愍念すること不可思議なり、衆生を度脫すること不可思議なり。』

時滿足王。王事訖已。手執善財。將入宮内。命就寶師子座。而告之曰。善男子。汝觀我家。善財即觀。廣大無極。七寶垣牆周匝圍遶。七寶講堂。無量百千衆寶樓閣而莊嚴之。乃至不可思議摩尼寶網。羅覆其上。五百侍女端嚴如天。如上所說。⁽¹⁷⁵⁾

時に滿足王は国事を終えて、善財を携えて、宮内に入り、命じて宝師子の座に就かせ、而も之に告げて曰はく、『善男子よ、お前は私の家を觀よ』と。

善財即ち觀るに、廣大なること極まり無く、七宝の垣牆周圍を圍遶し、七宝の講堂は無量百千の衆寶の樓閣にて之を莊嚴し、乃至不可思議なる摩尼の宝網を其の上に羅覆し、五百の侍女に端嚴なること天の如く、上に説く所の如し。……

善男子。我成就菩薩幻化法門。我此國土殺生偷盜。乃至邪見諸群生類。不可教化離諸惡業。我爲調伏令解脫故。化作人衆種種苦治。令捨十不善道一切諸惡。具足十善究竟樂。發阿耨多羅三藐三菩提心。具足一切智。善男子。當知我身口意。乃至蟻子不生害心。何況人耶。人是福田生諸善根。善男子。我唯知此幻化法門諸大菩薩得無生法忍。⁽¹⁷⁶⁾

『善男子よ、私は菩薩の幻化の法門を成就した。我が此の国土の殺生偷盜、乃至邪見の諸々の群生の類は、教化して諸々の惡業を離れさせることが不可能である。私は調伏して解脱せしめんが爲の故に、人衆の種々の苦治を化作し、十不善の道と、一切の諸惡とを捨てて、十善を具足し、究竟樂を得て、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、一切智を具足させる。善男子よ、當に知るべし、我が身口意は、乃至蟻子に至るまでも害心を生じない、いわんや人においてをや。人は福田にして諸々の善根を生ず。私は唯此の法門を知るのみである。』……

この満足王の教えは化作により十不善道と一切諸惡を捨てさせ十善を具足させるためのものであり、地獄という虚構をもって積善を説く仏法の一種の大衆教化の方便であるといえよう。王たる者がこうしたことを説くのが『華嚴』の説法の特色と考えられよう。善財の足は更なる教えを求めて善光城の大光王の所に向かう。

漸經人衆聚落城邑曠野諸難。心無疲倦。至善光城。……⁽¹⁷⁷⁾

漸く人衆の聚落城邑、曠野の諸難を経て心に疲倦無く、善光城に至り……

爾時善財。作如是念。我善知識在此城中。我今必定見善知識。聞菩薩行。菩薩正法。及諸法門。菩薩功德不可思議。境界不可思議。自在不可思議。平等法門不可思議。勇猛之力不可思議。我今必聞菩薩究竟境界。作是念已入善光城。見城七寶無量莊嚴。七重深塹周匝圍遶。……⁽¹⁷⁸⁾

爾の時に善財は是の如きの念を作さく、『私の探し求めている善知識は此の城中におられる。私はこの度必ずや定して善知識にお会いして、菩薩の行、菩薩の正法、及び諸々の法門、菩薩の功德の不可思議なること、境界の不可思議なること、自在の不可思議なること、平等法門の不可思議なること、勇猛力の不可思議なることを聞こう。私は今必ずや菩薩の究竟の境界を聞こう』と。是の念を作し終わりて善光城に入った。城を見るに七宝にて無量に莊嚴せられ、七重の深き塹は周匝を圍遶し、……

阿僧祇摩尼寶。而以莊嚴。彼大光王常處其中。爾時善財。於此一切嚴飾珍妙。心無染著。一心樂欲見善知識。見大光王。處於法堂寶師子座。結跏趺坐。衆寶莊嚴。敷以寶衣。萬阿僧祇寶像以爲莊嚴。種種妓樂而娛樂之。有二十八大人之相八十種好。而以莊嚴。身眞金色如明淨日。普照一切。如盛滿月衆宿中明。如梵天王處於大衆。如大海有衆珍寶。如雪山中出諸良藥。如大龍王雷震諸法實相音聲。如虚空清淨不受塵垢。如須彌山四種寶色。普照衆生性海。譬如寶洲智寶充滿。……⁽¹⁷⁹⁾

阿僧祇の摩尼寶を以て莊嚴した。彼の大光王は常に其の中におられた。爾の時に善財、此の一切の嚴飾の珍妙なるに、心に染著無く、一心に善知識をまみえんことを樂欲せり。大光王、法堂の師子の座に坐して結跏趺坐されておられるのを見ると、衆寶をもって莊嚴し、宝衣を敷かれ、萬阿僧祇の宝像で莊嚴され、種々の妓樂で娛樂し、二十八大人の相有⁽⁸⁰⁾り、八十種好⁽⁸¹⁾を以て莊嚴し、身は眞金色にして明淨の日の如く、普く一切を照らし、盛満の月の明らかなるが如く、梵天王の大衆に処するが如く、大海の中に衆の珍宝有るが如く、雪山の中より諸々の良藥を出だすが如く大龍王の諸法実相の音声を雷震するが如く、譬へば宝洲の智宝充滿するが如きであつた。……

善男子。我成就菩薩大慈幢行。清淨満足。我於無量不可說不可說諸佛菩薩所。聞所妙法。觀察清淨。修習莊嚴。善男子。我住此行。如法治國。觀察衆生。順行世間。如法教化衆生。攝取衆生。安置衆生。饒益衆生。如法熏衆生。如法教衆生。令修善根。觀法眞實。令諸衆生。得慈心。大慈心。大慈力心。饒益心。離恐怖心。攝衆生心。不捨衆生心。發於大願滅諸苦心。安穩衆生令得快樂。身心柔軟遠離心垢。捨生死樂常樂正法。除煩惱垢得清淨心。以一切善熏衆生心。斷生死流入深法海。滅諸有趣出無礙心。得一切智淨諸心海。信力堅固無能壞者。善男子。我以如是安住此行。如法治國。令諸人民離衆怖畏。有貧窮者來至我所。隨所求索。常開庫藏。而告之曰。恣意取之勿作衆惡。此城衆生悉向大乘。各見此城種種不同。或見垢穢。或見清淨。或見木石。或見瑠璃。或見無壞幢牆周匝圍遶。或見不可思議樓閣。阿僧祇寶而莊嚴。以正直心。修諸善根。於諸佛所求一切智。爲我宿世所攝衆生修菩薩行者乃見此城衆寶嚴淨。餘見垢穢。善男子。此城衆生。五濁惡時。行諸不善。我愍念彼。入於菩薩大慈爲首順世三昧。入此定時彼諸衆生。惡心惱心。諍心害心。皆悉滅。所以者何。此三昧力如是故。善男子。且待須臾。汝自見之。⁽⁸²⁾

『善男子よ、私は菩薩の大慈幢の行を成就し、清淨を満足している。私は無量・不可說不可說の諸佛菩薩の所に於て、此の妙法を聞いて、觀察して清淨に修習し莊嚴した。善男子よ、私は此の行に住し如法に國を治め、衆生を觀察して世間に隨行し、如法に衆生を教化し、衆生を攝取し、衆生を安置し、衆生を饒益し、如法に熏じ、如法に衆生を教え、善根を修し、法の眞實を觀ぜしめ、諸々の衆生をして慈心・大慈心・大慈力心・饒益心・離恐怖心、衆生を摂する心、衆生を捨てざる心、大願を發し諸々の苦を滅させる心を得させ、衆生を安樂にして快樂を得させ、身心柔軟にして心の垢を遠離し、生死の樂を捨てて常に正法を樂い、煩惱の垢を除いて清淨心を得、一切の善を以て衆生の心に熏じ、生死の流を斷つて深法海に入り、諸々の有趣を滅して無礙の心を出だし、一切智を得て諸々の心海を淨め、信力堅固にして能く

壊する者無くなるようにさせた。善男子よ、我是の如く此行に安住するを以て、如法に國を治め、諸々の人民をして、衆の怖畏を離れさせた。貧窮の者がいて、私の所に来るならば、求索する所に随つて常に庫藏を開き、而も之に告げて曰く、「意を恣にして之を取り、衆多の惡をなすこと勿れ」と。此の城の衆生は悉く大乘を信ずるようになった。各此の城を見るに種種同じからず。或は垢穢なりと見、或は木石と見、或は瑠璃と見、或は無壞の幢牆が取り巻いて見、或は不思議なる樓閣と見る。阿僧祇の寶を以て莊嚴し、正直心を以て諸の善根を修して諸佛の所に於て一切智を求め、我が宿世の所撰たりし衆生にして菩薩の行を修する者は、乃ち此の城を衆寶嚴淨なりと見る者もいれば、餘の者は垢穢なりと見る。善男子よ、此の城の衆生は五濁惡の時に、諸の不善を行つた。私は彼を愍念して、菩薩の大慈を首と爲し、世に順ずるの三昧に入らせたのである。此の定に入るとき、彼の諸の衆生の惡心・惱心・諍心・害心・皆悉く滅した。所以は云何。此の三昧力は法是の如くなるが故なり。善男子よ、ほんのしばらく待て、汝自ら之を見ん。」

時王即入大慈爲首順世三昧。入已善光大城六種震動。諸寶垣牆樓閣宮殿。欄楯窓牖。却敵半月。寶鈴羅網諸寶形像。出妙音聲讚歎彼王。
……⁽¹⁸⁴⁾

時に王即ち大慈を首と爲す順世の三昧に入られた。入りおわつて善光の大城は六種に震動し、諸宝の垣牆・樓閣・宮殿・欄楯・窓牖・卻敵・半月の宝鈴・羅網・諸宝の形像は妙なる音聲を出して彼の王を讚歎せり。……

時大光王。從三昧起。告善財言。善男子。我唯知此菩薩大慈幢行三昧。諸大菩薩以大慈蓋。普覆救護一切衆生。上中下品等觀無二。慈如大地載育衆生。……⁽¹⁸⁵⁾

時に大光王、三昧より起ち、善財に告げて言はく、

『善男子よ、私は唯此の菩薩大慈幢行三昧を知るのみ。諸々の大菩薩は大慈の蓋を以て普く覆つて、一切の衆生を救護し、上中下品無二なりと等觀し、慈は大地の如く衆生を載育する。……』

善財如是悲心念時。如來使天隨菩薩天。於虛空中。而告之曰。善男子。其有隨順善知識教。諸佛歡喜。其有隨順善知識教。近一切智。於善知識教。心無厭故。一切諸義悉現在前。善男子。汝詣安住王城。不動優婆夷所。是汝知識不久當見。⁽¹⁸⁶⁾

善財は是の如く悲心に念ずる時に、如來使天、隨菩薩天は、虚空の中で彼に告げて曰はく、

『善男子よ、其れ善知識の教に随順する者がおれば諸佛歡喜したまひ、其れ善知識の教に随順する人がおれば一切智に近づくであろう。善知識の教に心厭くこと無きが故に、一切の諸義は、悉く現じて前に在らん。善男子よ、汝安住王城の不動優婆夷の所を詣でよ。是れ汝の善知識なり。久しからずにして當に見るべし』と。この勧めに応じて善財は旅を続ける。

爾時善財。從智慧光明三昧起。漸漸遊行。至安住城。推問不動優婆夷今在何所。時有人言。善男子。不動優婆夷在其家内。父母守護親近。眷屬。周匝圍遶。爲無量衆演說正法。爾時善財。歡喜無量即詣其門。入彼家内見其宮殿。金色光明皆悉普照。觸斯光者身心柔軟。爾時善財。光明觸身。即得五百三昧門。所謂覺一切三昧門奇特幢三昧門。寂靜三昧門。遠離一切衆生三昧門。普眼三昧門。如來藏三昧門。得如是等五百三昧門。身心柔軟如七日胎。又聞妙香出過天人。……⁽¹⁸⁷⁾

爾の時に善財、智慧光明三昧より起ちて、漸漸に遊行して安住城に至り、不動優婆夷は今何の所におられるのかと推問した。時に人有り言はく、

『善男子よ、不動優婆夷は其の家の内に在して、父母守護し、親近し、眷屬周遶を圍遶し、無量の衆の爲に正法を演說されておられる』と。

爾の時に善財、歡喜すること無量にして、即ち其の門に詣り、彼の家の内に入れり。其の宮殿を見ると金色の光明ありて皆悉く普く照らしている、斯の光に照らされた者は身心柔軟となった。爾の時に善財は光明に身を照らされて、即ち五百の三昧門を得たり。所謂、覺一切三昧門・奇特三昧門・寂靜三昧門・遠離一切衆生三昧門・普眼三昧門・如來藏三昧門なり。是の如き等の五百の三昧門を身心柔軟なること、七日の胎の如し。又妙香を聞くに天人に出過せり。……

其有得見此優婆夷。一切煩惱皆悉除滅。十方衆生樂觀無厭。除明行足。爾時善財。見彼女人。不可思議法。不可思議三昧。不可思議無比妙色無量光明網一切無障。不可思議饒益衆生。不可窮盡諸眷屬海。觀察不可思議身。無有厭足。爾時善財。以偈頌曰。

常持清淨戒 精進修忍辱 譬如盛滿月 星中獨明耀⁽¹⁸⁸⁾

其れ此の優婆夷を見ることを得ること有らば、一切の煩惱は皆悉く除滅し、十方の衆生樂觀して厭くこと無けん。唯明行足のものをば除く。

爾の時に善財、彼の女人の不可思議の法、不可思議の三昧、不可思議なる無比の妙色、無量の光明網は一切障あること無く、不可思議に衆生を饒益し、窮尽す可からざる諸々の眷屬海を見て、不可思議の身を觀察して厭足有ること無し。爾の時に善財、偈を以て頌して曰く、
常に清淨の戒を持ち、精進して忍辱を修せば、譬へば盛満月の、星の中に独り明曜なるが如し。

爾時彼女。以善語愛語。答善財言。善哉善哉。善男子。乃能發阿耨多羅三藐三菩提心。我成就菩薩無壞法門。修學堅固之行。得一切法平等地陀羅尼。得一切法平等法門。得離有莊嚴三昧⁽¹⁸⁹⁾。

爾の時に彼の女、善語・愛語を用いて、善財に答へて言はく、

『善い哉善い哉、善男子よ、乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發した。我菩薩の無壞の法門を成就し、菩薩の堅固の行を修學して、一切法の平等陀羅尼を得、一切法の平等法門を得、離有莊嚴三昧を得た。』

爾時優婆夷答言。善男子。於過去世離垢劫中。有如來應供等正覺。號曰脩臂。出興於世。時有國王。名曰電光。我爲王女。中夜寂靜癡音樂時。五百侍女皆悉昏寐。我在樓上仰觀星宿。見彼如來在虛空中。如寶山王。天龍八部。不可思議大菩薩衆。恭敬圍遶。放大光明網。普照十方。彼佛毛孔出微妙香。我聞是香身體柔軟。心大歡喜。恭敬禮拜一心合掌。仰觀彼佛不見頂相。觀身左右不見邊際。相好莊嚴見無厭足。善男子。我於爾時。作如是念修何等業。出生如是身。長養如是身。具足如是身。清淨如是身。自在如是身。光明眷屬。諸莊嚴具。功德智慧。三昧陀羅尼。諸辯才藏。不可譬諭。善男子。時彼如來。知我心念。而告我言。汝應發不可壞心。除滅煩惱發勝妙心。不著一切有。發不懈怠心。隨順深入方便之法。發忍辱心。調伏衆生諸惡心海。發離癡心。遠離一切諸生死趣。發無厭心。見一切佛心無厭倦。發無知足心。悉飲一切諸佛法雲。發寂靜心。以一切佛方便。隨順世間。發守護心。護持一切諸佛法輪。發分別心。隨其所應演說法寶。皆令歡喜。善男子。我於爾時。從彼如來。聞此法教。清淨法門。求一切智。如來十力。所言不虛。光明莊嚴。清淨法身。相好莊嚴。如來眷屬。嚴淨佛刹。如來威儀。如來壽命。……⁽¹⁹⁰⁾

爾の時に優婆夷答へて言はく、

『善男子よ、過去世離垢劫の中に於て、如來・応供・等正覺⁽¹⁹¹⁾有して、号して修臂と曰ひ、世に出興したまひき。時に國王有り名けて電光と曰ひ、私は王女であつた。中夜寂靜にして音樂を廢するの時、五百の侍女は皆悉く昏寐せるも、我樓上に在りて仰いで星宿を見て、彼の

如來の虚空に中におられるのを見るに、宝山王の如くにして、天龍八部、不可思議なる大菩薩衆に恭敬し圍遶せられ、大光明の網を放ちて、普く十方をお照らしになられた。彼の佛の毛孔よりは微妙の香を出だした。我はの香をかぎて、身体柔軟にして心大いに歡喜し、恭敬し礼拝して、一心に合掌し、仰いで彼の佛の不見頂相を觀、身の左右を觀たてまつるに辺際を見ず、相好莊嚴せられて、見るに厭き足ることがなかつた。善男子よ、私は爾の時に於て次のように考へた、「何等の業を修してか是の如きの身を生じ、是の如きの身を長養し、是の如きの身の清淨、是の如きの身の自在、是の如きの身の光明を具足し、眷屬、諸々の莊嚴具、功德智慧、三昧陀羅尼、諸々の弁才藏ありて、譬喩す可からざるや」と。善男子よ、時に彼の如來、私の心念をご存知で、私に告げて言はく、「お前心に不可壞の心を發して煩惱を除滅し、勝妙の心を發して一切の有に著せず、不懈怠の心を發して隨順して深く方便の法に入り、忍辱の心を發して衆生の諸々の惡心海を調伏し、離癡の心を發して一切諸々の生死趣を遠離し、無厭の心を發して一切の佛をご覽になられ心に厭倦無く、無知足の心を發して悉く一切諸佛の心を發して悉く一切諸佛の法雲を飲み、寂靜の心を發して一切の佛の方便を以て世間に隨順し、守護心を發して一切諸佛の法輪を護持し、分別心を發して其の所應に隨ひて法宝を演説し、皆歡喜させるべきである」と。善男子よ、私は爾の時に於て、彼の如來に従つて此の法教、清淨の法門を聞き、一切智、如來の十力、所言の不虛、光明の莊嚴、清淨の法身、相好の莊嚴、如來の眷屬・嚴淨の佛刹、如來の威儀、如來の壽命を求めたり。……

善男子。我入此無壞法門。觀察一切法平等陀羅尼。顯現無量自在神變。……⁽¹⁹²⁾

善男子よ、我此の無壞の法門に入りて、一切法の平等陀羅尼を觀察し、無量の自在神變を顯現せり。……

爾時不動優婆夷。入萬三昧門。正念觀察。所謂專求莊嚴正法心無疲厭三昧門。離癡莊嚴三昧門。十力三昧門。佛無盡藏三昧門。住如是等三昧門時。十不可說佛刹微塵等世界六種震動。淨如瑠璃。一一世界中。各見百億如來。一一如來大衆圍遶。放大光明普照十方。或現兜率天。或現於一切世界。以妙音聲轉淨法輪。乃至示現大般涅槃。

時優婆夷。從三昧起。告善財言。善男子。汝見此不。唯然已見。善男子。我唯成就此無壞法門。爲一切衆生。說微妙法。皆令歡喜。諸大菩薩。遊行十方無有障礙。……⁽¹⁹³⁾

爾の時に不動優婆夷は、萬の三昧門に入り、正念に觀察した。所謂、専ら正法を莊嚴して心に疲厭無き三昧門・離癡莊嚴三昧門・十力三

昧門・佛無尽藏三昧門を求め是の如き等の三昧門に住せし時、十不可説の佛刹微塵に等しき世界は、六種に震動し、淨きこと瑠璃の如く、一一の世界の中に、各々百億の如來を見たてまつり、一一の如來は大衆に圍遶せられ、大光明を放ちて普く十方を照らし、或は兜率天を現じ、或は一切の世界に現じ、妙なる音声を以て淨法輪を轉じ、乃至、大般涅槃を示現したまへり。時に優婆夷三昧より起ち、善財に告げて言はく、

『善男子よ、お前は此を見たのかどうか。』

『唯然り已に見させて頂きました。』

『善男子よ、私は唯此の無壞の法門を成熟して、一切の衆生の為に微妙の法を説いて、皆歡喜させるのみ。諸々の大菩薩は十方に遊行して障礙有ること無し。……善財は不動優婆夷の勧めに従つて隨順一切衆生出家外道を訪ねる。』

爾時善財童子。一心正念彼優婆夷。是我眞善知識。念彼正教。念彼所説。念彼所發。念彼所開。念彼示現。念彼所歎。念彼所明。念彼廣演。念彼修習。隨順思惟。修遍修寂靜寂滅。照明觀察。漸漸經由城邑聚落。於日沒時入知足城。周遍推求隨順一切衆生外道。今在何所。於中夜時。見彼城北有一大山。光明照耀如初出。爾時善財。天明出城登彼山上。遙見外道靜處經行。成就妙色超逾梵王。一萬梵天眷屬圍遶。……⁽¹⁹⁴⁾

爾の時に善財童子は、一心に彼の優婆夷は是れ我が眞の善知識なりと正念し、彼の正教を念い、彼の所説を念い、彼の所發を念い、彼の所開を念い、彼の示現を念い、彼の所歎を念い、彼の所明を念い、彼の廣演を念い、彼の修習を念い、隨順し思惟して、遍修寂靜の寂滅を修し、照明に觀察して、漸漸に城邑聚落を經由し、日沒の時に於て、知足城に入り、周遍して隨順一切衆生外道は今何の所に在すやと推求せり。中夜の時に於て、彼の城の北を見るに一大山有り、光明照り曜くこと、日の初めて出づるが如し。爾の時に善財、天明に城を出て彼の山上に登り、遙かに外道を見るに、靜處に經行し、妙色を成就したまふこと梵王に超踰し、一萬の梵天眷屬に圍遶せられたり。……

善男子。我已安住至一切處菩薩之行。成就普觀三昧法門無依無作神足。以平等般若波羅蜜光明。觀察分別一切諸趣。一切衆生。死此生彼流轉諸有。種種雜類形色好醜。種種欲樂諸趣受生。所謂天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽。地獄餓鬼畜生。閻羅王處人非人處。彼諸衆生或著邪見。或好二乘。或樂大乘。以妙智慧種種方便。饒益衆生。或教世間種種技藝。欲令衆生得諸巧術陀羅尼門。或以四攝

攝取衆生。欲令一切得薩婆若。或歎波羅蜜。欲令衆生得一切智廻向。或歎發菩提心。欲令衆生於諸善根不可沮壞。或歎菩薩行。欲令衆生嚴淨佛刹。滿足大願教化衆生。或說厭離法。欲令衆生知惡行果受三塗苦。或說淨法。欲令衆生發歡喜心。於諸佛所植衆德本。得一切智果。或歎如來應供等正覺。欲令衆生發弘誓願。一向專求清淨法身。或歎如來功德。欲令衆生一向樂求佛無壞身。或歎如來無比妙法。欲令衆生得佛一切無壞功德。……⁽⁹⁵⁾

『……善男子よ、私は已に一切処に至る菩薩の行に安住し、普觀三昧の法門と、無依無作の神足とを成就し、平等なる般若波羅蜜の光明を以て、一切の諸趣、一切の衆生に死し彼に生じ、諸有に流転し、種々の雜類、形色の好醜、種々の欲樂、諸趣の受生を觀察し分別した。所謂、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・地獄・畜生・閻羅王の処、人非人の処なり。かの諸々の衆生、或は邪見に著し、或は二乗を好み、或は大乗を樂ひ、妙智慧の種々の種々の方便を以て衆生を饒益し、或は世間の種々の技芸を教えて、衆生をして諸々の巧術陀羅尼門を得させようと願ひ、或は四摂を以て衆生を摂取して、一切をして薩婆若を得させようと願ひ、或は諸々の波羅蜜を歎じて、衆生をして一切智の廻向を得させようと願ひ。或は發菩提心を歎じて、衆生をして諸々の善根に於て、沮壞することが不可能であることを願ひ、或は菩薩の行を歎じて、衆生をして佛刹を嚴淨し、大願を満足し、衆生を教化させようと願ひ、或は厭離の法を説きて、衆生をして惡行の果は三塗の苦を受ることを知らせようと願ひ、或は淨法を説きて、衆生をして歡喜心を發し、諸佛の所に於て衆の德本を植え、一切智の果を得させようと願ひ、或は如來應供等正覺を歎じて、衆生をして弘誓の願を發し、一向に専ら清淨の法身を求めさせようと願ひ、或は如來の功德を歎じて、衆生をして佛の一切の無壞の功德を得させようと欲す。……』

善男子。我唯知此菩薩至一切處行法門。諸大菩薩……⁽⁹⁶⁾

善男子よ、私は唯此の菩薩の一切処に至る行の法門を知るのみ。諸々の大菩薩は……。更なる求道のために善財は青蓮華香長者を訪ねる。善財はこうして十住をすべて達成し、次なる十行の階梯に進んでいくのである。

註

- (1) 正念とは「①正しいおもい。正しい想念。八正道の一つ。念は常に念じて忘れないの意。常に心にとどめること。常に思いつづけていること。邪念を離れて仏道を思い念ずること。②真実のおもいに住すること。心を正して真実のすがたを常に念ずること。現象のすがたにとらわれないで深く実理を思念すること。正しいおもい。浄土門において、鎮西流では疑慮のないことをいい、西山流では三心の中の信樂をいい、真宗では信心とするのと称名念佛であるとの二説がある。一すじに仏を念ずる心。仏の救済を信じて疑わない心。」中村元著『佛教語大辞典』による。以下注記のない場合はこの辞典による。
- (2) 思惟とは、「①考えること。対象を思量し分別すること。一つのことを思いつづけること。熟考。②心の中で思う。③理論的に考えること。④達成しようとする。⑤注意すること。⑥修道のことをいう。⑦十法行の一つ。理によって意味を察知すること。思念すること。⑧十六の記憶形式の第六。類似した相を考えること。⑨四神足の一つ。⑩新訳では覺という。統覚機能。ヴァイシェーシカ学派でいう。」
- (3) 慧とは「①道理を選び分ける判断をする心作用。分別判断。分別し判断する心作用。事物や道理を識知・判断・推理する精神作用。後の注釈では「法において能く揀択す」と称する。『俱舍論』では、心所法のうちの十大地法の一つ。②検討さるべき事物についての吟味弁別。唯識説では別境の心所の一つ。事理を分別決定して疑念を断ずる心の作用。また事理に通達する作用。」
- (4) 神力とは「①仏・菩薩の有する不可思議のはたらき。超自然力の作用。神通力に同じ。不思議な力。威神力。②加持力に同じ。」
- (5) 仏刹とは「[S] buddha-kṣātra の音写。仏国に同じ。仏国土。仏の国。浄土。[S] はサンスクリット語の略記。」
- (6) 解了とは「理解。通達。了解。知識による理解。」
- (7) 住持とは「とどめたもち、失わないこと。教えをたもつこと。②住处・立脚点。よりどころ。仏果（仏の境地）のこと。③加持に同じ。④安住護持して失わないこと。⑤寺院に住して法を護持する者の意。一か寺を主管する僧。住職。⑥「如何住持」は具合はどうだ、の意。」
- (8) 三昧とは「[S] samādhi の音写。三摩地・三摩提とも音写。定・正受・等持などと漢訳する。①心が静かに統一されて、安らかになっている状態。何ものかに心を集中することによって、心が安定した状態に入ることである。禪定と同義語。『大智度論』に、「一切禪定、亦名定、亦名三昧」という。しずけき心。心の静まった状態。心を専注して無念なること。心を不動にした宗教的瞑想の境地。心を専注すること。宗教的瞑想。瞑想。心静かな瞑想。主観と客観とが不二融即した地位（禪宗の一部のひとは「ざんまい」とよむ。）②三昧場ともいい、僧をして死者の冥福を祈らせる意から、墓所・葬場の意に転じた。この用法は現在、地方には残っている。この辞典には「解説」として次のように記している。心をひとところに定めて動かさないから「定」、正しく所観の事がらを受けるから「受」、平等の心をたもつから「等持」、諸仏・諸菩薩が有情界に入つて平等にそれを守り念ずるから「等念」、定中に法樂を現するから「現法樂住」、心に暴をととのえ、心の曲がったのを直し、心の散つたのを定めるから「調直定」、心の動きを正して、法に合一させる依処となるから「正心行処」、思慮をとどめて心の思いを凝結するから「息慮凝心」といわれる。[S] はパーリ語の略記。」
- (9) 禪定とは「[S] dhyāna [P] jhāna の音写である禪と、その意識である定とを合成してできた語。心静かに瞑想すること。六波羅蜜の第五。心静かな内観。心の計らいを静めること。心を動揺させないこと。精神集中の修練。坐禪をして心を一点に専注する宗教的瞑想。坐禪によって心身の

深く統一された状態。②四静慮のこと。③靈山における入山籠居の修行。この意味の語は『妙法寺記』、謡曲『善知鳥』、『廻国雜記』などに見られる。白衣装束して登山することも禪定といったらしい。また駿河の富士山・越中の立山・加賀の白山の山頂などを禪定と称した。このような意味において古来、出羽三山での修行は、羽黒山・月山は、不惜身命修行の山、湯殿山は修行成就即身成仏証得の山といわれた。」

- (10) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九五頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四〇頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六八八頁下段 ⑦『さとりの遍歴』上 一五四頁―一五五頁 ⑧は所謂『六十華嚴』、⑨は『八十華嚴』、⑩は『四十華嚴』、⑪はサンスクリット原典からの日本語訳である。〔海幢比丘は④⑤⑥では海幢比丘、⑦ではサーラドヴァジャ比丘となっている。表2 参照〕
- (11) 阿僧祇とは「[S] asamkhyā [S] asankhyeya の音写。無数・無央数と漢訳する。①無量数、不可数量。②インドの数量の一つ。10の59乗を意味する。〕

- (12) 婆羅門とは「[S] Brahmana の音写。インドにおけるカーストのうち最高のもの。僧侶階級。インド古代の氏姓制度の最上位。主としてヒンズー教聖典の学習・教授や、さまざまな祭祀を司ることを職としている者」

- (13) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九五頁中段―下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四〇頁 中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六八八頁下段―六八九頁上段 ⑦『さとりの遍歴』上 一五五頁―一五六頁

- (14) 刹利とは「[S] ksatriya の音写。刹帝利の略語。古代インドのカーストの一つ。王族・武士階級」
- (15) 四摂法とは「仏教を実践する人が、人々を誘いつけるために具える四種の行為、即ち①布施、②愛語、③利行、④同事の四つで、①与えること、②やさしいことを用いること、③ためをはかること、④協同することとされる。」

- (16) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九五頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四〇頁 中段―下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六八九頁上段 ⑦『さとりの遍歴』上 一五六頁（但し④では「腰兩邊」であるが、⑤では「其腰間」、⑥では「其臍輪」、⑦では「臍輪」と若干表現が異なる。）

- (17) 五通とは「五つの神通のことで、天眼通・天耳通・宿命通・他心通・神足通という超人的な力」

- (18) 仙人とは「①世間を離れて山などに住し、神変自在の術ありといわれる人。シナの仙人の觀念を經典の中にもちこんだもの。②ヒンズー教の隠者。彼らは怒ると呪いを発する。③聖仙の意。④サーンキヤ学派の開祖も仙人とよばれた。」

- (19) 三宝とは「①三つの宝の意。仏と法と僧。さとりを開いた人（仏[S] buddha）と、その教え（法[S] dharma）と、それを奉ずる教団（僧[S] sangha）という三つをいう。仏（さとりを開いた教えの主）・法（その教えの内容）・僧（その教えを受けて修行する集団）の三つを宝にたとえた語。これは仏教を構成する三つの大切な要素である。三宝に帰依することは仏教徒としての基本的条件である。②これらの三つは別のものとしてみればそれぞれ別個であるが、しかし本質的には一つとも考えられる。また釈尊亡き後も三宝はあるべきであるから、その点で、仏像と経巻と出家とを三宝といえることができる。そこで後代には、三宝には、一体三宝（無上の真理と、その清浄の徳と、和合の徳）、現前三宝（如来と、如来の証した法と、如来の法を学ぶ者）、住持三宝（仏像と、経巻と、剃髮染衣の僧）の三種があると考えられた。三宝が本質的には同一であるとみなすのを一体三宝といい、個々別々であるとみなすのを梯橙の三宝という。③お供えする道具。」

(20) 梵行とは「①梵は清浄の意で、欲望を断ずる修行をいう。バラモンが実行する学生期の修行。バラモンが一生涯の間にたどる四つのアーシユラマ〔Śrama〕住居の第一を梵行期（学生期）といい、ヴェーダの学習・祭事の習得などの宗教的教育に専念すべき期間で、この間には師の家に入って身心を潔斎して精進を行なう。②バラモンの行なう清らかな行為。③ヤマ〔Yama〕制裁（制戒）の一つ。④清らかな修行。清き行。比丘が戒律をたもって修行すること。清浄行。淫欲を断つ実践を行なう。淫欲の戒め。さとりに至る実践行。仏教の修行。⑤正道をさす。」

(21) 調伏とは「①抑制。制御、調和制伏。ととのえ静めること。制し伏すること。身心を制すること。身のあり方を正しい状態にととのえ、悪をおさえ、除くこと。自らの身心を制御して悪を排し、対外的には敵意ある者を教化して悪心を捨てさせ、障害をもたらすものを降伏させること。②律する。ならして教えを奉じていくようにすること。毘那耶に同じ。③こらしめる。降伏させること。④密教では不動・降三世・軍荼利・金剛夜叉などの忿怒の相をあらわすものを本尊として、怨敵・悪魔などを信服させる修法を調伏法として五種または四種修法の一つに数える。」

(22) ④『大正新脩大藏經』第九卷 六九五頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』第十卷 三四〇頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』第十卷 六八九頁上段 ⑦中段 ⑧『さとりの遍歴』上 一五六頁一五七頁

(23) 龍とは「龍神。海や川に住む巨蛇の類。蛇形の鬼神。天龍八部衆の一つ。もとインド原住民の間で行なわれていた蛇神崇拜が、仏教にとり入れられたもの。」

(24) 如来とは「〔P〕S tathāgata の漢訳。〔P〕tathā（かくのごとく）+〔P〕S gata（行ける）という意味であるが漢訳者〔P〕tathā+〔P〕S āgata（来れる）と訳して『如来』と訳した。修行を完成した人。人格完成者。全き人。向上につとめた人。向上し来れる人。真理の体現者。仏教ばかりでなく、当時のインドの一般諸宗教であまねく使われていた呼称である。ジャイナ教ではアルタマーガデー語で、修行完成者のことを tathāgaya という。②仏のこと。仏の十号の一つ。さとりの完成に到達した仏。大乘仏教では「真如より来生するもの」の意に解した。真如から来て（真理の体現者として）衆生を教え導くという、活動的な側面からする仏の異名。如（さとりの妙処）から現われて来た人。あるがままの絶対の真理に従って来り現われた人。一行の釈によると、諸仏が如実の道に乗って来て正しいさとりを得るように、今の仏のこのように来る、の意。③阿彌陀如来。」

(25) ④『大正新脩大藏經』第九卷 六九五頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』第十卷 三四〇頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』第十卷 六八九頁中段 ⑦『さとりの遍歴』上 一五七頁一五八頁（但し、④では「胸徳字」、⑤では「胸前正字中」、⑥では「其胸臆吉祥相中」、⑦では「胸の正形の卷毛」と若干表現が異なる。）

(26) 阿修羅とは「〔S〕asura の音写。①ペルシャの古語 ahura と語源が同じで、初めは善神の名前であった。②後代のインドでは神 (sura) でない者という語源解釈が施され、非天すなわち悪神とされ、常にインドラ神と戦い、あるいは日や月と争う者となる。神々と戦闘を交えるという神話は、ヴェーダ聖典や叙事詩などに見られる。闘争してやまぬもの。争う生存者。仏教では六道の一つ、八部衆の一つとされ、一種の鬼神とみられ、須彌山下の大海底にその住居があるとされる。六道を略して五道とするときは、天・人・餓鬼・畜生・地獄に分属される。胎藏界曼荼羅では外金剛部院に列する。また無酒神とも漢訳される。」

(27) 方便とは「①方法。てだて。巧みなてだて。便宜な手段。工夫。巧みなはかりごとを設けること。巧みになされたはかりごと。すぐれた教化方

法〔S〕upayakausalyaの訳語〕としても用いられる。真実に裏づけられ、また真実の世界へ導くでだて。衆生利益のための手段。差別の事象を知って衆生を済度する智慧。はぐくみ。真実の教えに導くために仮に設けた法門のこと。すぐれた教化方法。仮のてだて。衆生を救済し、さとりに導くための一時のてだてとして説かれた教え。他をしてさとらしめるための手段。②十波羅蜜の第七。③真実を証するために修行すること。加行。④くわだて。事業。発起して努めること。⑤しかた。⑥努力のこと。⑦柔軟な心がまえ。⑧行く道の手段。たとえば、七方便位。

(28) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九五頁下段―六九六頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三三〇頁下段―三四一頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六八九頁中段―下段 ⑦『さとりにへの遍歴』上 一五八頁(但し、④と⑥では「其背」、⑤では「其背上」、⑦では「背骨」と若干表現が異なる。)

(29) 二乗とは「①声聞乗と縁覚乗の二つをいう。乗は乗り物の意。声聞とは、師の教えによつてさとる人で、仏の教えを直接聞き、四諦の道理によつてさとる人たち、およびその立場をいう。縁覚とは、理法を体得して自らさとる人で、仏の教えによらず、ひとり十二因縁の道理を観察してさとる人たち、およびその立場をいう。大乘の立場からいえば、この二種の人たち、およびその立場は自己の完成にとどまって、多くの他人の救済に向かわないから、劣った立場(劣乗・小乗)であるとするのである。小乗仏教における聖者。たとえ仏道に入っていないも、その形式的な面にとられすぎたり、自分のさとり、自分の問題のことだけしか考えていないような人びと。自分だけのさとりに満足して、他人救済の慈悲活動を忘れた者。②一乗以外の第二の乗り物。③大乘と小乗。」

(30) 我見とは「①自我という見解。自我についての見解。自我ありとの考え。人間には永遠に変わらない主体があるという誤った考え。常・一・主・宰の自我〔S〕atman)があるとして、それに執着する見解・思想の意。永遠の主体に対する執着。このわれわれの肉体・精神が諸条件の集まりにすぎないことを知らず、実体的な私の存在を認める見解。実体的自我があると解する見方。②実我があると執する誤った見解。五見の一つ。五見は、我見(我があると考える)・辺見(断常一見のいずれかにかたよる)・邪見(因果を信じない)・見取見(一見解を最上のものと固執する)・戒禁取見(さまざまな制戒を守ってこれを最上とする)。いずれも悪い見解である。③何ものが我であるとみなす見解。たとえば、『物質的な形(色)は我である』という。五取蘊〔S〕upādāna-skandha)のいずれかの中に我があるという見解〔S〕draśana)。身見(有身見〔S〕sat-kāyadrśi)と同義。④自己に対する執着の見解のある人。わたくしを實在視する者。⑤自己のとりわれ。」

(31) 不浄観とは「観法の一つ。肉体のけがらわしさを観想して煩惱・欲望を取り除く方法。身の不浄を観じて食欲を離れる観法。五停心観の一つ。特に、死屍が次第に腐敗して散り失せ、ついに白骨と化するまでのすがたを心中に観想すること。それは異性の容色の美しさに対する欲望を制するためである。」

(32) 慈悲とは「仏・菩薩が衆生をあわれみ、いつくしむ心。あわれみの心。万人に対する愛。いつくしみと同情。②衆生に樂を与える慈〔S〕maitrī)と、衆生の苦を抜く悲〔S〕karuṇā)とをいう。慈の原語は多くの場合〔S〕maitrī)であるが、それは〔S〕mitra(友)という語からつくられた抽象名詞で、最高の友情とでもいうべきもの。特定の人に対してではなく、すべての人びとに友情をもつことが慈である。また〔S〕karuṇā)の原意は悲しい気持をとにもすることであり、従って他人に対するあわれみ、同情を意味する。『悲は『かなしみ』とも、『あわれみ』ともよむ』③天台では、慈は与樂の意で父の愛にたとえられ、悲は拔苦で母の愛にたとえられる。④動詞として、いつくしむ、の意。⑤『唯願慈悲垂哀』は、ど

うぞ、の意。⑥空観にもとづく慈悲を最高のものと考え、三縁の慈悲を説く。

- (33) 瞋恚とは「①いかり。いかり憎むこと。自分の心にたがうものをいかりうらむこと。腹立ち。憎悪。瞋に同じ。②三毒の一つ。食欲・愚癡とともに三毒といわれ、身心を熱惱せしめ、諸悪行を起させる。」

- (34) 縁起観とは「因縁観。十二縁起の循環して相続く状態を明らかに観じて煩惱をなくする観法。」(因みに縁起とは「①因縁生・縁生・因縁法ともいう。他との関係が縁となって生起すること。(Aに)縁って(Bが)起ること。よって生ずることの意で、すべての現象は無数の原因(因[hetu]や条件(縁[pratya])が相互に関係しあって成立しているものであり、独立自存のものではなく、諸条件や原因がなくなれば、結果(果[phala])もおのずからなくなるということ。仏教の基本的教説。現象的存在が相互に依存しあって生じていること。理論的には、恒久的な実体的存在が一つとしてありえないことを示し、実践的には、この因果関係を明らかにし、原因や条件を取り除くことによって現象世界(苦しみの世界)から解放されることをめざす。仏教では縁起している事実のほかに固定的実体を認めない。俗な表現によれば、すべてのものが相對するもので、互いに引き合い押し合いすることによって成立していること。持ちつ持たれつの関係。後世には縁起の觀念を分けて、業感縁起・頼耶縁起・真如縁起・法界縁起の四種を立てるようになった。②華嚴宗では、機縁縁起の意に解する。機とは、はずみ。仏教修行というねじをかけることで、人間・衆生のこと。縁起とは人の素質のよしあしに応じて説を起すこと。③ゆかり。もののつくられるゆかり。由緒。④書につくられた次第。⑤寺院・仏像などの歴史・由来、または利益功德の伝説。寺の草創の由来書。寺にまつわる利益の物語を述べた文や絵より成る。⑥俗に物忌み、断ち物などをし、あるいは事をなすに当たって吉凶を占うこと。」

- (35) 寂滅とは「安らかなること。静まっていること。静寂。煩惱の火の消えはてた、心の究極の静けさ。身心一切の活動をやめて平静なること。寂靜に帰して一切の相を離れていること。ニルヴァーナのこと。仏の境地。さとりの境地。究極のさとりの境地。法性真如の道理。」

- (36) ④『大正新脩大藏經』第九卷 六九六頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』第十卷 三四一頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』第十卷 六八九頁下段 ⑦『さとりの遍歴』上 一五八頁―一五九頁

- (37) 夜叉と「[S]yakṣa [E]yakṣa の音写。葉叉・夜叉などとも音写。捷疾鬼・勇健。能敵などとも漢訳する。北方に住むクヴェーラ神(毘沙門天と同一視される)の配下と考えられる半神。もと、なにかしらの神聖な靈的存在、超自然的存在を意味していたらしい。紀元前のヤッカの彫像の顔面は端麗で明るい表情に満ちていて、少しも怪奇異様なすがたや恐ろしいようすを示していない。仏教にとり入れられ、八部衆の一つとされ、毘沙門天の眷属として北方を守護すると考えられた。また羅刹とともに、八部鬼衆の一つとされ、人を傷害して食らう悪鬼とされる。人食い鬼。暴悪な鬼神。しかし他方では、むしろ人に恩恵を与える例も叙事詩などに見いだされる。たとえば「マハーバーラタ」においては、一ヤクシャが自殺しようとするシカンデインを助ける話などがある。夜叉は悪人を食うが善人を食わず、むしろ善人を守護すると考えられるゆえんである。」

- (38) 羅刹とは「[E]rakṣas の音写。惡鬼の一種。通力により人を魅し、また食うという。恐ろしい鬼。惡鬼類。後には、仏教の守護神となる。羅刹天は十二天の一つ。神王形で甲冑を着け、刀を持って白獅子に乗る。」

- (39) 果証とは「果報としてのさとりの原因としての修行によって得た結果としてのさとりの。」

- (40) ④『大正新脩大藏經』第九卷 六九六頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』第十卷 三四一頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』第十卷 六八九頁下

段一六七〇頁上段 ⑩『さとりへの遍歴』上 一五九頁

- (41) 緊那羅とは「[S] kinara の音写。①美妙的な音声をもち、よく歌舞をなす天の樂神。古代インドで神話における鬼靈(半神)の一群で、ガンダルヴァのごとく、音楽をもつてクペーラ神に仕える。歌神。天の樂師。音楽に巧みであり、ヒマラーヤ山中に住む。②人とも人でないともいえないもの(人非人)。人であるとも人でないともいえない天の樂人。緊那羅は通俗語源解釈により「人間かしら」という疑問の意に解せられた。この語源にて Albrecht Weber は、インド宮廷に使われていたギリシア婦人の悲しげな声 (kinrya) に由来すると推定したが、まだ一般には承認されていない。③後に仏教では天龍八部衆のひとつとされた。」

- (42) 眷属とは「①眷顧隷属の意。とりまきの者の意。親しい随伴者をいう。付属の者。随従隷属する者。従者。随行者。伴。②なかま。③仏・菩薩につき従うもの。仏の従者・弟子など。仏・菩薩の脇侍、従属する諸尊。ただし三尊仏はいわない。薬師仏の十二神将・不動明王の八大童子・千手観音の二十八部衆の類。④一族の者。配下の者。親しみ従う者の意で、一族郎党。⑤このことが神道にもとり入れられ、主要な神に従属する神々、または使者をいう。神の一族。⑥身内の者。親族。自分につき従う者。妻子・奴隷・従者など。王の王妃たちと親友たち。」

- (43) 乾闥婆とは「[S] gandharva の音写。ガンダルヴァはインド神話上の妖精の名。天界に住み、神々の飲料であるソーマ酒を守護するものと考えられた。仏教にとり入れられて、天龍八部衆の一つ。緊那羅とともに帝釈天に仕えて音楽を奏する。」

- (44) 実相とは「①すべてのものの真実のありのままのすがた。真実の本性。真理。ほんとうのすがた。それは平等の實在、常住不変の理法であるという。相は特質の意。②真実だという思い。真実の觀念。」

- (45) 涅槃とは「①おそらく俗語の nibbān の音写。迷いの火を吹き消した状態。ニルヴァーナ ([S] nirvāṇa)。『金光明最勝王經』には、それに十の意義があるとする。②ニルヴァーナに入る(動詞)。③無為に同じ。」

- (46) ④『大正新脩大藏經』第九卷 六九六頁上段一中段 ⑤『大正新脩大藏經』第十卷 三四一頁上段一中段 ⑥『大正新脩大藏經』第十卷 六九〇頁上段一中段 ⑦『さとりへの遍歴』上 一五九頁一六〇頁(但し、④では「其口」、⑤と⑥では「其面門」、⑦では「口」と若干表現が異なる。)

- (47) 転輪聖王とは「統治の輪を転ずる聖王の意。インド神話において世界を統一支配する帝王の理想像。世界の政治的支配者。転輪王とも輪王ともいう。全世界の皇帝。武力を用いず、ただ正義のみによって全世界を統治する理想的帝王。ジャイナ教徒やヒンズー教徒の間でも考えられていたし、また古典文の中にも出てくるが、仏教では特に重要な意味をもつ。仏教では三十二相と七宝を具え、武力・刀剣によらず、正義によって征服し、支配するといわれる。これには金輪・銀輪・銅輪・鉄輪の四王がある。一説によると、人間の寿命が二万歳に達した時に、まず鉄輪王が出現して、天下の王となり、八万歳に達した時に金輪王が出て四天下に君臨し、四方を順化するという。その輪とは輪宝(これらの王が感得した神聖な車輪)が王を先導して、一切の障害を破碎、降伏する力のあるものである。」

- (48) 七宝とは「[S] sapta-ratana [P] satra-ratana ①七つの宝。七種の宝石。経論により異説がある。i 金 ([S] suvarṇa)・銀 ([S] rūpya)・瑠璃 ([S] vaidūrya)・頗黎 ([S] sphatika 水晶)・砗磲 ([S] musāragalva)・赤珠 ([S] lohita-muktika 珊瑚)・瑪瑙 ([S] āsmagarbha) の七。ii 珊瑚・琥珀・如意珠・甄叔迦 ([S] kimśuka)・釈迦毘陵迦 ([S] Sakra-abhiṣagṇa)・摩羅迦陀 ([S] marakata)・金剛(ハツ) iii 金・銀・珊瑚・

真珠・碑礫・明月珠・摩尼珠のこと。iv 金・銀・琉璃・珊瑚・琥珀・碑礫・瑪瑙のこと。v 金・銀・瑪瑙・真珠・玫瑰のこと。vi 金・銀・毘琉璃・頗梨・碑礫・瑪瑙・赤真珠のこと。vii 轉輪聖王が具えているという七種の宝。金輪宝・白象宝・紺馬宝・神珠寶・王女宝・主藏臣・主兵臣。②七聖財・七財に同じ。

(49) 四兵とは「古代インドにおける四種の軍隊。象兵・馬兵〔騎兵〕・車兵〔戰車兵〕・歩兵をいう。」

(50) 眞諦とは「①真理。眞実。②眞実の。③さとりに関する真理。④現実生活における事実をありのままに告げること。⑤究極的立場。究極の眞実。最上の真理。第一義諦。一般に世間でうけとられている眞実（俗諦）に対する。⑥空の眞実。実相は空なりと説く立場。」

(51) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九六頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四一頁中段 ⑥『さとりへの遍歴』上 一六〇頁―一六一頁（何故か最も詳細に論じているにはこの「兩目」からの記述が無い。）

(52) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九六頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四一頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九〇頁中段 ⑦『さとりへの遍歴』上 一六一頁（④では「其眉間」、⑤と⑥では「眉間の白毫」と若干表現が異なる。）

(53) 帝釈とは「インドラ (S Indra) 神。ヴェーダ神話における最も有力な神であったが、後、仏教にとり入れられて梵天とともに仏法を守護する神とされた。かれの名は俗語で Sakka とよばれるので「釈」と音写され、また神々の帝王とみなされるので、「帝」という。仏教神話においては、忉利天の主で、須弥山頂の喜見城に住む。」

(54) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九六頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四一頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九〇頁中段 ⑦『さとりへの遍歴』上 一六一頁

(55) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九六頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四一頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九〇頁中段 ⑦『さとりへの遍歴』上 一六一頁―一六五頁

(56) 檀波羅蜜とは「[S] dāna-pāramitā の音写。また檀那波羅蜜多ともいう。布施（ほどこし）の完成。布施を完全なものにすること。」

(57) 五欲とは「①五つの欲 (S kama) の意。五官の貪り。五官の欲望。五官の悦楽。眼・耳・鼻・舌・身の五官による色・声・香・味・所触という五種の感覚対象に対する感官的欲望。五境（五つの対象）に執着して起こす五種の情欲のこと。色・声・香・味・所触の五境を享樂すること。愛欲のこと。総じて世俗的な人間の欲望。②欲望の対象となる色・声・香・味・触の五種。色 (S rūpa) ・声 (S śabda) ・香 (S gandha) ・味 (S rasa) ・触 (S spraṣṭavya) 触れられるもの」の五境のこと。五つの感覚機官（五根）の対象となる色・声・香・味・触（五境）は人の欲望をひき起こす原因となるので、五境を五欲という。色・声・香・味・所触の五種の対象を享樂すること。しばしば妙欲と漢訳する。

(58) 忍辱とは「耐え忍ぶこと。忍耐。苦難に耐えること。忍びこらえること。侮辱や迫害に対して忍び耐えて、心を安らかに落ち着け、瞋恚の念を起さないこと。六度の一つ。②雪山にある草の名。」

(59) 禪波羅蜜とは「[S] dhyaṇa-pāramitā の音写。心統一の完成。静慮波羅蜜に同じ。」

(60) 般若波羅蜜とは「①智慧の完成の意。完全な智慧。最高の智慧の完成。智慧を完全なものにすること。卓越した知性の至高の境地。智慧行。人間が眞実の生命に目覚めた時に現われる根源的な叡智。六波羅蜜の一つ。②十波羅蜜の一つ。般若によって人びとに正しい教えを授け、人びとを

解脱せしめる。③初期大乘仏教の時代に成立した經典の名。」

(61) 陀羅尼とは「仏の教えの精要で、神秘的な力をもつと信ぜられる呪文。比較的長句の呪をいう。総持などとも漢訳され、法を心にとどめて忘れないこと、すぐれた記憶力という意味をもっている。また多くの善をたもつという意味にも解せられる。」

(62) 薩婆若とは「[P] sabhāṇa [S] sarva-jña の音写。一切智と漢訳する。すべてを知る人。一切智者。全智者。仏のいふこと」

(63) ④『大正新脩大藏經』第九卷 六九六頁下段―六九七頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』第十卷 三四一頁下段―三四二頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』第十卷 六九一頁下段―六九二頁下段 ⑦『さとりの遍歴』上 一六五頁―一六八頁 ⑧と⑨では「其頂上」⑩では「其頂上肉髻之間」、⑪では「頭頂の肉髻の間」と若干表現が異なる。」

(64) 灌頂とは、「頭に水を灌ぎかけること。①もとインドの国王の即位や立太子の時行なった儀式。四大海の水をもつて頂にそそぎ、祝意を表わした。②大乘仏教では、これを菩薩が最終の地位(第十地)に入るとき、諸佛が智水をその頂にそそぎ、法王の職を受けることを証するといふ趣意を寓した。③密教では重要な作法とされ、代表的な儀式である。仏の位にのぼるための密教の儀式。如来の五智を象徴する水を、弟子の頂にそそぐ作法によって、仏の位を継承させることを示し、現在でも重要な宗教儀式として行なわれている。実際には灑水杖という棒の先を水にひたして、灌頂をうける人の頭頂に軽くあてる。密教では灌頂に種々の分類と作法があるが、修行を積んだ僧で、人の師・阿闍梨位を得ようとする者に対して大日如来の秘法を授けるため、特定の作法で灌頂壇で行なう伝法灌頂(または阿闍梨・受職灌頂)と、密教を学んで弟子となろうとする人のために行なう弟子灌頂、さらに多くの人に仏縁を結ばせるため壇に入らせ、簡単な作法を授ける結縁灌頂などがある。天台宗ではその他に蘇悉地灌頂を行なう。また摩頂・授記・放光の広義の三種灌頂や、成就・除難・息災・増益・降伏など、その目的からの名称を加えた四種・五種などの数え方や、伝法灌頂の方法に能力の乏しい弟子のために師が慈心をもって諸作業を略した印法灌頂、特定の道場で行なう作業灌頂、師と弟子が互いの心で行なう以心・瑜祇灌頂などの別がある。灌頂を行なう室を灌室といい、灌頂中に、災障を除くために灌頂護摩を行なう。真言宗や天台眞盛宗の受戒には灌頂を行なうから授戒灌頂という。水中の魚類などを利益するために、灌頂のときの莊嚴に用いる灌頂幡や塔婆を川や海に流す行事を流灌頂といい、日本では中世から盛行した。」

(65) 十住とは「菩薩の修行すべき五十二の段階のうち、第十一位から第二十位までをさす。心を眞実の空理に安住するところ。〔初発心住・治地住・修行住・生貴住・方便具足住・正心住・不退住・童真住・法王子住・灌頂住をいう。〕」

(66) 生貴(住)とは「菩薩の階位である十住の第四。」

(67) 長養とは「①増大させること。②成長増大すること。③仏道修行を長く助けること。④または養。修行を全うするために自分の身体を愛護して、長く養うこと。心身を養い育てること。心身を生長させ、養うこと。」

(68) 信行とは「教えを信じて行ずることをいう。他人から教えられたことを信ずること。随信行のこと。法行・随法行に対する。」

(69) 色界とは「①清らかな物質から成り立つ世界。欲界の上にある天界で、欲界のよごれを離れ、物質的なものがすべて清浄である世界。物質的世界のうちで、ことに本能的欲望が盛んではないところを単に色界とよぶ。欲望は断じたが肉体を存する者の世界。清らかな物質の世界。この界の衆生はもろもろの欲望を離れて男女の別なく光明を食とし、言語とする。欲界の上にある天界。初禪・第二禪・第三禪・第四禪の四天に分かれ、

また十七天に分かれる。三界の一つ。②眼の対象としての色と形。十八界の一つ。眼根の対境。」

- (70) 大梵天とは「①色界十七天の一つで、初禪天の第三。大梵天王の住処。②色界の第一の静慮処にいる天。③大梵天の主。シキン (Sikkin 尸棄) といひ、頂髻と漢訳する。娑婆世界の主となり、深く仏法に帰依して、仏が世に出ることに必ず最初に来て説法を請ひ、また白仏を持って、常に帝釈天とともに仏の左右に侍すという。大梵天王に同じ。」

- (71) 自在天とは「[S] Mahesvara (摩醯首婆羅と音写) のことで、世界の主宰者。主としてシヴァ ([S] Śiva) 神をさしている。自在天外道の主神。色界の諸天の最頂なる色究竟天に住する。密教ではこれを大日如來の応現ともしている。」

- (72) 魔天王とは「魔王。マール。[S] Mara。」

- (73) 化樂天とは「自ら妙樂の境地をつくり出して楽しむ神々。六欲天 (欲界六天) の第五。ここに生まれた者は、自ら環境をつくり出して娯樂し、八千歳の壽をたもつという。樂變化天に同じ。」

- (74) 兜率天とは「[S] Tisita の音写。欲界の六天のうちの第四天。通俗語源解釈により「満足せる」の意に解し、妙足と漢訳されるが、語源は不明である。この天の内院は、將來、仏となるべき菩薩の住処とされ、釈尊もかつてここで修行し、現在、弥勒菩薩がここで説法していると説かれる。その天人の壽命は四千年、その一昼夜が人間界の四百年に当たるといふ。」

- (75) 夜摩天とは「①六欲天の第三。時分を知り、五欲の樂を受ける。その一昼夜は人間界の二百年に相当し、二千歳の壽をたもつという。〔觀無量壽經〕に「如夜摩天宮、有五百億微妙宝珠、以為映飾」とあって、ヤーマ天だけをとり出しているのは、古來の神々の上に叙事詩のヤーマ神が現れたのであると考えられる。②夜摩天の住処。六欲天の第三の領域。③[S] Suyama の音写、須夜摩・蘇夜摩の略で、時分・善分と漢訳する、と解する解釈もある。しかしスヤーマは夜摩天の子と解することもある。」

- (76) 帝釋天とは「梵天とともに仏法の守護神。」

- (77) 修羅とは「①阿修羅 ([S] asura の音写) の略。②[S] sūta の音写。酒の一種。蘇羅に同じ。」

- (78) 迦樓羅とは「[S] garuda の音写。金翅鳥・妙翅鳥・頂癭鳥・食吐悲苦声と漢訳する。インド神話上の架空の大鳥。理想化された靈鳥。四天下の大樹におり、龍を常食とし、両羽翼を広げると三百三十六万里あるという。その羽は金色である。大乘經典では天龍八部衆の一つとされ、密教では梵天・自在天が衆生を救うためにこの鳥のすがたをかりてあらわれるという。また文殊の化身ともいふ。胎藏界曼荼羅外金剛部院にある。〔この鳥の概念は南アジア諸国一般に広がり、インドネシア航空の名称は「ガルダ」である。〕」

- (79) 摩睺羅伽とは「[S] mahoraga の音写。大腹・質朴・非人・大胸腹行と漢訳する。大いなるはらばうもの、大うわばみ、の意。天龍八部衆の一つ。蛇神。」

- (80) 閻羅王とは「閻魔王・閻羅王とも書く。仏典では閻魔と書くほうが多かったが、シナ・日本では一般に閻魔と書く。死後の世界の支配者で、亡者を裁く者。死者の罪を裁く者。死者の罪を裁く地獄の主。冥界の王。もとインドのバラモンから入ってきたもので、また餓鬼界の主、地藏菩薩の化身などと考えられ、種々の説がある。シナ・日本では裁判官である十王の一人としてシナの風俗や道教の影響を受けている。密教では焰摩天といひ、形容は異なる。」

- (81) 無量無作とは「①はたらきのないこと。②人為的につくられないこと。③作為のないこと。無為。④無効。⑤特質を異にすること。不一致。⑥願い求める思いもない。⑦つくり出すことがない。⑧自然のままにあるもの。」
- (82) 正意とは「①意に邪念のないことをいう。②仏の正しき本意」
- (83) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九七頁上段・中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四二頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九二頁下段・六九三頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一七〇頁・一七一頁
- (84) 楚毒とは「苦しみ。苦痛。」
- (85) 有為とは「①つくられたものの意。因と縁との和合によってつくりだされた(為作・造作・有作の)諸現象をいう。因縁によってつくられた生滅変化するもの。つくられたもの。直接原因、間接原因によって成立した事物。無為の対。②無常で変遷するもの。生じ滅していくあり方をいう。すなわち、因果関係において生滅する諸現象のすがた。この因果関係を離れたものを無為という。七十五法のうち三無為を除き、百法のうち六無為を除いた他の諸法のこと。無為の対。③仮のもの。④唯識説では虚妄分別に同じ。⑤煩惱。⑥因縁によって生じ、または滅すること。⑦生命を成立せしめている力、または生命体。可視的世界のすべてをさすこともある。」
- (86) 三界とは「①仏教の世界観で、衆生が往来し、止住する三つの世界の意。三つの迷いの世界。衆生が生まれて死に輪廻する領域としての三つの世界。すなわち、欲界・色界・無色界の三つ。生きものが住む世界全体のこと。生死流転する迷いの世界を三段階に分けたもの。われわれの世界は、欲界・色界・無色界から成る。i 欲界は、最も下にあり、姪欲・食欲の二つの欲を有する生きものの住む所である。欲の盛んな世界。この中には地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六趣(または六道)があり、欲界の天(神々)を六欲天という。ii 色界は、欲界の上にあり、姪欲と食欲とを離れた生きものの住む所である。ここでは絶妙な物質(色)より成るので色界という。欲を離れた清らかな世界。四禪天より成り、これを分けると十七天となる。iii 無色界は、最上の領域で、物質を超えた世界である。精神のみが存在する。高度の精神的な世界。物質を厭い離れて、四無色定を修めた者が生まれる所である。その者どもはすぐれたヨーガに入っている。これもまた天界に属するが、この最高処である非想非非想(処)天を有頂天と称する。これらの区分は神話的な分類ではあるが、もともと人びとの禪定、すなわち人びとの精神を静かならしめる修養の発達の段階を表す。②三界に属するもの。三界のうち存するもの。三界の衆生。三種の領域からなるこの世界。③迷いの世界。迷いの境界。生死を重ねる迷いの世界。この世。人間世界。④i 三世の諸仏の境界、ii 自己を除いた他の衆生の境界、iii 自己の一心である自己の境界をいう。⑤法界と心界と衆生界。」
- (87) 六波羅蜜(大乘仏教において菩薩がニルヴァーナに至るために実践すべき六種の徳目。波羅蜜は[P] Paramitaの音写で、彼岸に至ることと解せられ、度と漢訳する。理想を達成すること、完成の意味である。六度ともいう。六つの徳目の完成。a 布施(dāna)。与えること。それには財施(衣服などを施すこと)と法施(真理を教えること)と無畏施(恐怖を除き、安心を与えること)との三種がある。b 持戒(sīla)。戒律を守ること。c 忍辱(kṣanti)。苦難に堪え忍ぶこと。d 精進(vīrya)。真実の道をたゆまず実践すること。e 禪定(dhyāna)。精神を統一し、安定させること。f 智慧(prajñā)。真実の智慧を得ること。)
- (88) 修習とは「①身に修めること。かけることなく行なうこと。身につくまで修行すること。②十法行の一つ。自己と他人とは平等に住していると

いう智慧によって修行すること。③ヨーガの行。④天台宗で止観を実践すること。」

- (89) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九七頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四二頁中段下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九三頁上段中段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一七一頁一七二頁

- (90) 障礙とは「①障害。さまたげ。障り。②さとりを得るための障害となるもの。四種の障害がある。a 教法をそしること。b 自己に執着すること。c この世界の苦しみを恐れること。d すべての生きものに対する利益について無関心であること。」

- (91) 分別とは「①「外的な事物にとらわれた」断定。②争う。③授記に同じ。④論議。九分教の一つ。⑤配分すること。⑥はからい。⑦いちいち分解する。⑧くべつ。⑨区別すること。開示すること。見分けること。⑩区別して考える。わきまえ。⑪「二つ以上の」場合を分けて説くこと。⑫概念をもって表示すること。⑬妄分別をなすこと。妄想。⑭主観的構想。構想作用。アーイシェーシカ哲学でいう。⑮思惟のこと。⑯区別。⑰妄分別。誤った認識。妄想のこと。⑱物事を分析し、区別すること。⑲特殊。ヴァイシェーシカ哲学でいう。⑳思惟のこと。㉑区別。㉒分別起の略。考えることから起る。㉓人びとに理解させるように分けて説く。㉔考えること。㉕受心をいう。㉖知識をもってする理解。対象を思慮すること。」

- (92) 究竟とは「①無上の。究極の。畢竟の。②事理の至極。究極の境地。物事の極限。至極。③きわめ尽くす。到達する。至る。きわめる。着く。菩薩の極位をきわめること。最後の点まで達する。④徹底的に体得する。⑤実現すること。達成すること。⑥最後の目的。究竟法身。仏教の最終至高目的。相待「相対」を超えた境地。⑦さとりの。成仏する位。天台宗で立てる六師の最高位。究竟位の略。⑧華嚴宗で立てる究竟位。⑨「究竟の」「くつきょうの」とよむ。すぐれて力の強い。」

- (93) 修治とは「修行によって清めること」

- (94) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九七頁中段下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四二頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九三頁中段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一七二頁一七三頁「休捨優婆夷は④と⑤では休捨優婆夷、⑥では伊沙那優婆夷、⑦ではアーシャー優婆夷となっている。」

- (95) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九七頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四三頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九三頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一七五頁

- (96) 津済とは「渡し場。」

- (97) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九八頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四三頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九七頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一七九頁一八〇頁

- (98) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九八頁中段下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四三頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九七頁中段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一八〇頁一八一頁「毘目多羅仙人は④では毘目多羅仙人、⑤では毘目瞿沙仙人、⑥では大威猛聲仙人、⑦ではビームラニルゴシャ仙となっている。」

- (99) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 六九八頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四四頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九五頁中

段 ①『さとりの遍歴』(上) 一八二頁―一八三頁

(100) 錠光仏(また定光仏とも書く。)とは「過去世に出現して、釈尊に未來には成仏すると予言した仏。釈尊以前に現われたと伝説的に伝える二十四人の仏の一人とされている。錠光如来ともいう。」

(101) 妙徳とは「①すぐれた徳。②妙徳菩薩、すなわち文殊菩薩のこと。」

(102) 功德蔵とは「功德の宝蔵。善根を収め、たくわえたもの。②仏をいう。すべての功德の成就されたのが仏であるから、蔵にたとえる。③阿弥陀仏の名号をいう。あらゆる功德を一つの名号の中に収めるからである。」

(103) 毘盧舎那佛とは「[S]Vairocana(輝くもの)の音写。略して盧舎那佛・遮那。びるさな仏。もとは太陽の意で、仏智の廣大無辺なことの象徴とし、華嚴教の本尊。無量劫海に功德を修して正覺をとる蓮華蔵世界の教主。千葉の蓮華に坐し、右手は施無畏印、左手は与願印とする(奈良の大仏はこのすがたをとっている)。『華嚴経』『梵網経』に説く。法相宗では盧舎那佛・釈迦仏を受用・変化一身とし、毘盧舎那佛を自性身として区別し、天台宗では毘盧舎那佛・盧舎那佛・釈迦仏を、法身・報身・応身の三身に配して窮竟の妙境に顕現するのを毘盧舎那佛とする。密教では大日如来と同等とする。」

(104) 普眼とは「①あまねく一切衆生を觀する觀世音の慈眼。②普法(一つのものの中に一切を具えていること)を見るのを普眼と名づける。法界縁起を見る心。」

(105) ①『大正新脩大藏経』 第九卷 六九八頁下段―六九九頁上段 ②『大正新脩大藏経』 第十卷 三四四頁中段―下段 ③『大正新脩大藏経』 第十卷 六九五頁下段―六九六頁下段 ④『さとりの遍歴』(上) 一八四頁―一八六頁

(106) ①『大正新脩大藏経』 第九卷 六九九頁中段 ②『大正新脩大藏経』 第十卷 三四五頁上段 ③『大正新脩大藏経』 第十卷 六九六頁下段 ④『さとりの遍歴』(上) 一八九頁―一九〇頁

(107) ①『大正新脩大藏経』 第九卷 六九九頁中段 ②『大正新脩大藏経』 第十卷 三四五頁上段 ③『大正新脩大藏経』 第十卷 六九七頁上段 ④『さとりの遍歴』(上) 一九〇頁―一九一頁

(108) ①『大正新脩大藏経』 第九卷 六九九頁中段―下段 ②『大正新脩大藏経』 第十卷 三四五頁上段 ③『大正新脩大藏経』 第十卷 六九七頁中段 ④『さとりの遍歴』(上) 一九二頁

(109) ①『大正新脩大藏経』 第九卷 六九九頁下段 ②『大正新脩大藏経』 第十卷 三四五頁中段 ③『大正新脩大藏経』 第十卷 六九七頁中段 ④『さとりの遍歴』(上) 一九三頁

(110) 髻髪とは「髪を無造作に纏い付ける状態。」(海音寺潮五郎著『人生遍路華嚴経』六八頁による。)

(111) ①『大正新脩大藏経』 第九卷 六九七頁下段 ②『大正新脩大藏経』 第十卷 三四五頁中段―下段 ③『大正新脩大藏経』 第十卷 六九七頁下段 ④『さとりの遍歴』(上) 一九四頁

(112) ①『大正新脩大藏経』 第九卷 六九九頁下段―七〇〇頁上段 ②『大正新脩大藏経』 第十卷 三四五頁下段 ③『大正新脩大藏経』 第十卷 六九七頁下段―六九八頁上段 ④『さとりの遍歴』(上) 一九四頁―一九五頁

- (113) 三惡道とは「生あるものが行ないつづつた悪行の結果として、死後生まれる世界またはあり方を、趣（または道）といい、悪趣に地獄・餓鬼・畜生の三つを数える。この三つと修羅・人間・天とを合わせて六道という。輪廻のうちにある生存のあり方である。三惡趣ともいう。」
- (114) 閻羅とは「①閻魔羅の略。閻魔王のこと。②閻魔の住居。」
- (115) 趣とは「①来世におもむくこと。②衆生が煩惱によって業をつくり、その惑業に引かれておもむき住む所のこと。これを六種にわけて六趣という。道ともいう。③境遇。④生活の道すじ、の意。」
- (116) 須彌とは「[S] Sumen の音写。妙高山と漢訳する。仏教の宇宙觀によれば世界の中心に高くそびえる巨大な山。大海の中にあつて、金輪の上にある、その高さは水面から八万ヨージヤナ [S] Yoiana 由旬）あつて九山八海がとりまいてゐる。そのまわりを日月がめぐり、六道・諸天はみなその側面、または上方にある。その頂上に帝釈天の住む宮殿があるという。」
- (117) 示導とは「不思議な神通力を示すこと。」
- (118) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四五頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九八頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一九五頁
- (119) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四五頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九八頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一九五頁
- (120) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四五頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九八頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一九五頁 ⑧『さとりの遍歴』(上) 一九六頁
- (121) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四六頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九八頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一九六頁 ⑧『さとりの遍歴』(上) 一九七頁
- (122) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四六頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九八頁中段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 一九七頁
- (123) 本処とは「①自分の住する場所。②もとのところ。」
- (124) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四六頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九八頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二〇〇頁〔方便命婆羅門は、④では方便命婆羅門、⑤と⑥では勝熱婆羅門、⑦ではジャヨシユマーヤタナ婆羅門となっている。〕
- (125) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四六頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九八頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二〇〇頁 ⑧『さとりの遍歴』(上) 二〇一頁
- (126) 人身とは「人の身。人間としての身体。人間としての存在。」
- (127) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四六頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九八頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二〇一頁

- (128) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇〇一頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四六頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九九頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二〇一頁―二〇二頁
- (129) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇一頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四六頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 六九九頁中段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二〇二頁
- (130) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇二頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四七頁下段―三四八頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇〇頁下段―七〇一頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二〇九頁
- (131) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇二頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四八頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇一頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二〇九頁
- (132) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇二頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四八頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇一頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二〇九頁―二一〇頁
- (133) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇二頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四八頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇一頁中段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二二頁(彌多羅尼童女は④では彌多羅尼童女、⑤と⑥では慈行童女、⑦ではマイトラヤニ童女となっている。)
- (134) 閻浮檀金とは「閻浮樹の大森林を流れる河の底に産する砂金。その黄金は赤黄色で紫色を帯びている。金のうち最も高貴なものとされた。この大森林は閻浮提(須彌山と雪山との間にあり、その閻浮樹林を流れる河から採取されると考えられた。諸經典に「閻浮檀(金)の光」の表現が多い。原語は普通[S] jambū-nada-suvarga [S] jambū-nada-suvarg-ṇiṣka である。
- (135) 欄楯とは「石垣。垣根。てすり。玉垣のようなもの。仏塔の外側に欄楯をめぐらすべきことが律に記してある。」
- (136) 窓とは「まど」[P] vātāyana。」
- (137) 牕とは「風通しまど」[S] vātā-āyatana。」
- (138) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇二頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四八頁中段―下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇一頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二二頁―二二三頁
- (139) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇二頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四八頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇一頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二三頁
- (140) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇二頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四八頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇一頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二四頁
- (141) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇三頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四九頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇二頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二五頁
- (142) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇三頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四九頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇三頁上

段 ①『さとりの遍歴』(上) 二二七頁〔善現比丘は④では善現比丘、⑤では善見比丘、⑥では妙見比丘、⑦ではスダルシヤナ比丘となっている。〕

(143) 経行とは「①静かに歩む。あちこち歩む。へめぐり歩く。ゆつくりと歩きまわること。歩行。静かな散歩。一定の場所をめぐり、また行き来して歩くこと。食後や、疲労をあげたとき、坐禅していて眠気を催したときなどに、身心を整えるために、一種の運動として静かに散歩する。身体を軽快ならしめる散歩。そぞろ歩き。禅宗では普通、坐禅中の疲労をなおし、眠気をさますために、一定の場所を往復して歩くことをいう。禅宗では「きんひん」とよむ。②経行処に同じ。ひろにわ。[5] caṅkrama-vana ③本尊の前で読経しながらめぐり歩く儀式。」

(144) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇三頁下段〜七〇四頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四九頁下段〜三五〇頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇三頁中段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二〇頁〜二二二頁

(145) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇四頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五〇頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇三頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二二頁

(146) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇四頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五〇頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇四頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二四頁

(147) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇四頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五〇頁中段〜下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇四頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二四頁〔釋天主童子は④では釋天主童子、⑤では自在主童子、⑥では根自在主童子、⑦ではインドリエーシュヴァ童子となっている。〕

(148) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇四頁中段〜下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三四五頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇四頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二四頁

(149) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇四頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五〇頁下段〜三五二頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇四頁上段〜七〇六頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二五頁〜二二九頁

(150) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇五頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五二頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇六頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二二頁〜二二三頁〔自在優婆夷は④では自在優婆夷、⑤では具足優婆夷、⑥では辯具足優婆夷、⑦ではプラブーター優婆夷となっている。〕

(151) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇五頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五二頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇七頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二三頁〜二三四頁

(152) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇五頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五二頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇七頁下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二九頁

(153) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇五頁下段〜七〇六頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五二頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇七頁下段〜七〇八頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二二九頁〜二四〇頁〔甘露頂長者は④では甘露頂長者、⑤では明智長者、⑥では

は具足智長者、①ではヴィドヴァーンズ家長となっている。」

- (154) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇六頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五二頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇八頁上段
段①中段 ①『さとりの遍歴』(上) 二四〇頁―二四二頁

- (155) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇六頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五三頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇八頁下段
段①『さとりの遍歴』(上) 二四二頁―二四四頁

- (156) 十力とは「①仏に特有の十種の智力。仏が全智者であることを示す十の力。十の智慧のはたらき。仏のもつ十種の力。さまたげなくはたらく。すなわち、i 処非処智力。道理にかなうことと道理にかなわぬことを弁別する力。ii 業異熟智力。一つ一つの業因とその果報(異熟)との関係を如実に知る力。iii 静慮解脱等持等至智力。四禪・八解脱・三三昧・八等至などの禪定を知る力。iv 根上下智力。衆生の機根の上下優劣を知る力。v 種種勝解智力。衆生の種々の望み(意樂)を知る力。vi 種種界智力。衆生や諸法の本性を知る力。vii 遍趣行智力。衆生が種々のところ(地獄やニルヴァーナなど)へおもむくことを知る力。viii 宿住隨念智力。自他の過去世のことを思い起こす力。ix 死生智力。衆生がここに死んでかの所に生まれることを知る力。x 漏尽智力。煩惱を断じた境地(ニルヴァーナ)と、それに到達するための手段を如実に知る力。②十力を有する者。仏のこと。③菩薩が有する十種の力。」

- (157) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇六頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五三頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇九頁上段
段①『さとりの遍歴』(上) 二四六頁

- (158) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇六頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五三頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇九頁中段
段①『さとりの遍歴』(上) 二四七頁

- (159) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇六頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五三頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇九頁中段
段①『さとりの遍歴』(上) 二四八頁〔法寶周羅長者は④では法寶周羅長者、⑤では法寶髻長者、⑥では尊法寶髻長者、⑦では有徳の長者ラトナチューダとなっている。〕

- (160) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇六頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五三頁下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇九頁中段
段①『さとりの遍歴』(上) 二五一頁―二五二頁 ⑦『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇九頁中段 ⑧『さとりの遍歴』(上) 二四八頁

- (161) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇六頁下段―七〇七頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五三頁下段―三五四頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七〇九頁中段
段①『さとりの遍歴』(上) 二四八頁―二五一頁

- (162) 十地とは「①菩薩が修行すべき五十二の段階のうち、特に第四十一位から第五十位までを十地という。すなわち、歡喜地・離垢地・發光地・焰慧地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地の十段階。〔このうち、第七地以前と第八地以後との區別について、聖徳太子は独自の解釈を施している。〕②第十地のこと。」

- (163) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇七頁上段―中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五四頁上段―中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷

七一〇頁上段―中段 ①『さとりの遍歴』(上) 二五二頁―二五二頁

- (164) 如来・応供・(正遍知)・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊とは「仏によせられた十の異名。如来 (S tathāgata) は、真如から来現した者。応供 (S arhat) は、人間と神々から尊敬・供養される資格のある者。正遍知 (S samyak-sambuddha) は、完全に真理を究めた者。明行足 (S vidyā-caraka-sampanna) は、三明の智慧と身体・言語の行為とが完全に具わった者。善逝 (S sugata) は善く(よりの境地に) 行ける者。世間解 (S loka-vid) は世間・出世間のことを知悉する者。無上士 (S anuttara)・調御丈夫 (S purusa-dāmya-sārathi) は、至上の人。衆生を制御する御者。天人師 (S sātāvānaṃ ca manuṣyaṇaṃ ca) は、神々と人びとの師。仏 (S buddha) は、さとれる者の略称。世尊 (S bhagavat) は、世間から尊ばれる者。」

- (165) 回向とは「①廻向に同じ。②ふり向けること。③自らが積んだ、または修めた善根・功德を人びと(や生きもの)のために向けること。④自分の功德を他人に施し極楽往生の資としようとなげうこと。仏事法要を営んで、その功德が死者の死後の安穩をもたらすよう期待すること。追善。」
- (166) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇七頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五四頁中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七一〇下段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二五五頁〔普眼妙香長者は④では普眼妙香長者、⑤と⑥では香料商サマントラネートラとなっている。〕

- (167) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇七頁下段―七〇八頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五四頁中段―下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七一〇下段―七一二頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二五五頁―二五七頁

- (168) 応病與藥とは「仏が人びとの精神的素質にしたがって法を説くのを、医師が病に適應した薬を与えることに喩えていう。ブツダを医者王とよぶことは古くから行なわれ、人間の種々の迷い、とりわけ貪り・怒りなどを病と称した。教えを受ける人間の素質・性向・要求に応じて個々別々に法を説くことを喩えた語。」

- (169) 応機接物とは「相手に応じて正しい対し方をする。機物は衆生や修行者を指し、応接は相手に応じて指導することをいう。修行者を指導すること。師家が学人の素質に応じて種々の手段を用いて教化すること。」

- (170) 対機説法とは「人を見て法を説くこと。教えを受ける者の素質に適した教えを説くこと。病に応じて薬を与えることにたとえられる。」

- (171) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇八頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五五頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七一二頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二五七頁―二五九頁

- (172) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇八頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五五頁上段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七一二頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二五九頁

- (173) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇八頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五五頁上段―中段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷 七一二頁中段―七一八頁上段 ⑦『さとりの遍歴』(上) 二六一頁―二六二頁〔満足王は④では満足王、⑤では無厭足王、⑥では甘露火王、⑦ではアナラ王となっている。〕

- (174) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇八頁中段―下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 三五五頁中段―下段 ⑥『大正新脩大藏經』 第十卷

- 七一八頁中段下段 ①『さとりの遍歴』(上) 二六五頁～二六六頁
- (175) ①『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇八頁下段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五五頁下段 ④『大正新脩大藏經』 第十卷 七一八頁下段 ⑤『さとりの遍歴』(上) 二六七頁
- (176) ①『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇八頁下段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五五頁下段～三五六頁上段 ④『大正新脩大藏經』 第十卷 七一九頁上段～中段 ⑤『さとりの遍歴』(上) 二六八頁～二六九頁
- (177) ①『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇九頁上段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五六頁上段 ④『大正新脩大藏經』 第十卷 七一九頁中段 ⑤『さとりの遍歴』(上) 二七一頁(大光王は、①と②と③では大光王、④ではマハープラバ王となっている。)
- (178) ①『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇九頁上段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五六頁上段～中段 ④『大正新脩大藏經』 第十卷 七一九頁中段～下段 ⑤『さとりの遍歴』(上) 二七五頁～二七六頁
- (179) ①『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇九頁中段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五六頁下段 ④『大正新脩大藏經』 第十卷 七二〇頁上段～中段 ⑤『さとりの遍歴』(上) 二七二頁～二七三頁
- (180) 大人の相とは「仏や転輪聖王が身に具えているすぐれた容貌・形相をいう。」
- (181) 八十種好とは「また八十随形好ともいう。八十の吉相の意。仏の身体に具わる八十の副次的特徴。仏のもつ八十の小さな特徴。仏の人間と異なつた相好の美を細別して表現したもの。インド人が身体の理想的な特色を数えたもので、象徴的な名が多い。普通は三十二相に付随して仏身を飾るといわれるが、重複するものもある。百大劫の長い修行によってこれを感じ得ると説かれている。」
- (182) ①『大正新脩大藏經』 第九卷 七〇九頁下段～七一〇頁上段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五七頁上段～中段 ④『大正新脩大藏經』 第十卷 七二〇頁下段～七一〇頁中段 ⑤『さとりの遍歴』(上) 二七五頁～二七六頁
- (183) 五濁とは「悪世における五種のけがれ。劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五つをいう。五つのけがれ。五つの濁り。末世における五種の避けがたいけがれ。けがれた世相における五つの特徴をいう。i 劫濁([S]kalpa-kāśāya) 時代の濁り。時代は濁り、戦争や疫病や飢饉などがおおくなること。時代的な環境社会のけがれ。ii 見濁([S]drśik) 思想の乱れ。思想が悪化すること。よこしまな思想がはびこること。iii 煩惱濁([S]kleśa-k) 煩惱がはびこること。貪り・怒り・迷い(癡)などの煩惱の燃えさかる人間のあさましいすがた。悪徳がはびこること。iv 衆生濁([S]sattva-k) 衆生の果報が衰え、心が鈍く、身体弱く、苦しみの多くなつたすがた。人間の資質が低下すること。v 命濁([S]āyus-k) 衆生の寿命が次第に短くなること。最後には十歳までになる。この五濁は、初めから盛んではなくて、稀薄な状態から漸次熾烈になるといわれ、これを五濁増という。」
- (184) ①『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁上段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五七頁中段 ④『大正新脩大藏經』 第十卷 七二二頁中段 ⑤『さとりの遍歴』(上) 二七七頁～二七八頁
- (185) ①『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁中段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五七頁下段 ④『大正新脩大藏經』 第十卷 七二二頁下段 ⑤『さとりの遍歴』(上) 二八六頁

- (186) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁下段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五八頁上段〜中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二二頁中段 ①『さとりの遍歴』(上) 二八三頁(「不動優婆夷は、④と⑤と⑥では不動優婆夷、①ではアチャラー優婆夷となっている。」)
- (187) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁下段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五八頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二二頁中段 ①『さとりの遍歴』(上) 二八六頁
- (188) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁上段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五八頁中段〜下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二二頁下段 ①『さとりの遍歴』(上) 二八六頁〜二八八頁
- (189) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁上段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五八頁下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二三頁上段 ①『さとりの遍歴』(上) 二八九頁
- (190) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁上段〜中段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五八頁下段〜三五九頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二三頁上段〜中段 ①『さとりの遍歴』(上) 二九〇頁〜二九二頁
- (191) 等正覚とは「正等覚ともいう。①正しいさとりの。仏の境地。一切平等のさとりの。②(真理を)正しくさとった人。最高至上のさとりを得た人。平等の理をさとった仏。(ただし玄奘は『俱舍論』で[samyak-sambuddha]を「正等覚」と訳している。③仏の十号の一つ。④真宗においては、信心獲得の念仏者は、現世に正定聚不退転の境地に住し、次の世に阿弥陀仏の報土に往生して直ちに成仏するがゆえに、現世の正定聚の境地を彌勒に等しいと称し、等正覚と名づける。」
- (192) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁下段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五九頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二四頁上段 ①『さとりの遍歴』(上) 二九五頁
- (193) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七一〇頁下段〜七二二頁上段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三五九頁中段〜下段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二四頁上段 ①『さとりの遍歴』(上) 二九五頁〜二九六頁
- (194) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七二二頁上段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三六〇頁上段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二四頁中段 ①『さとりの遍歴』(上) 二九八頁〜二九九頁(随順一切衆生外道は④では随順一切衆生外道、⑤と⑥では遍行外道、⑦では遊行者サルヴァガーミンとなっている。)
- (195) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七二二頁中段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三六〇頁上段〜中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二四頁下段〜七二五頁上段 ①『さとりの遍歴』(上) 二九九頁〜三〇〇頁
- (196) ④『大正新脩大藏經』 第九卷 七二二頁中段〜下段 ③『大正新脩大藏經』 第十卷 三六〇頁中段 ⑤『大正新脩大藏經』 第十卷 七二五頁中段 ①『さとりの遍歴』(上) 三〇一頁

表1 善財童子がこれまで訪ねた善知識とその教えなど

	善知識名	位	知悉分野	教えの内容
1	文殊師利	菩薩		
2	功德雲	比丘	我唯知此普門光明觀察正念諸佛三昧	念仏三昧門
3	海雲	比丘	我唯知此一法門	『普眼經』
4	善住	比丘	我唯知此一無礙法門	無礙の法門
5	彌伽	良医	我唯知此菩薩所言不虛法門	『輪字莊嚴光經』
6	解脫	長者	我唯修此如來無礙法門	無礙莊嚴の法門
7	海幢	比丘	我唯知此清淨光明般若波羅蜜三昧法門	清淨光明般若波羅蜜三昧
8	休捨	優婆夷	我唯知此法門（＝離憂安穩幢）	離憂安穩幢法門
9	毘目多羅	仙人	我唯知此菩薩無壞幢智慧法門	菩薩無壞幢智慧の法門
10	方便命	婆羅門	我唯成此菩薩無盡法門	菩薩の無盡法門
11	彌多羅尼	童女	我唯知此般若波羅蜜普莊嚴法門	般若波羅蜜普莊嚴の法門
12	善現	比丘	我唯知此隨順菩薩燈明法門	隨順菩薩燈明の法門
13	釋天主	童子	我唯知此巧術智慧法門	巧術智慧の法門
14	自在	優婆夷	我唯知此無盡盡功德莊嚴法門	無尽功德藏の法門
15	甘露頂	長者	我唯知此如意功德藏法門	如意功德寶藏の法門
16	法寶周羅	長者	我唯知此滿足大願法門	大願を滿足する法門
17	普眼妙香	長者	我唯知此令一切衆生歡喜普門法門	一切衆生を歡喜させる法門
18	滿足	王	我唯知此幻化法門	菩薩幻化の法門
19	大光	王	我唯知此菩薩大慈幢行三昧	菩薩大慈幢行三昧
20	不動	優婆夷	我唯成就此無壞法門	無壞法門
21	隨順一切衆生	出家外道	我唯知此菩薩至一切處行法門	菩薩至一切處行法門

表2 善知識の名称の異同

六十華嚴		八十華嚴	四十華嚴	梵語華嚴（『さとりの遍歴』）
善知識名	属性	善知識名	善知識名	善知識名
文殊師利	菩薩	文殊師利	文殊師利	マンジュシュリー菩薩
功德雲	比丘	徳雲	吉祥雲	メーガシュリー比丘
海雲	比丘	海雲	海雲	サーガラメーガ比丘
善住	比丘	善住	妙住	スプラティシュティタ比丘
良醫彌伽	醫師	彌伽	彌伽	ドラヴィタ人メーガ
解脫	長者	解脫	解脫	ムクタカ長者
海幢	比丘	海幢	海幢	サーラドヴァジャ比丘
休捨	優婆夷	休捨	伊舎那	アーシャー優婆夷
毘目多羅	仙人	毘目瞿沙	大威猛声	ビーシュモータラニエルゴーシャ仙
方便命	婆羅門	勝熱	勝熱	ジャヨーシュマーヤタナ婆羅門
彌多羅尼	童女	慈行	慈行	マイトラーヤニー童女
善現	比丘	善見	妙見	スダルシャナ比丘
釋天主	童子	自在主	根自在主	インドリエーシュヴァラ童子
自在	優婆夷	具足	辯具足	プラブーター優婆夷
甘露頂	長者	明智	具足智	ヴィドヴァーンス家長
法寶周羅	長者	法寶髻	尊法寶髻	有徳の長者ラトナチューダ
普眼妙香	長者	普眼	普眼	香料商サマンタネートラ
滿足	王	無厭足	甘露天	アナラ王
大光	王	大光	大光	マハーブラバ王
不動	優婆夷	不動	不動	アチャラー優婆夷
隨順一切衆生	外道	遍行	遍行	遊行者サルヴァガーミン